その話は犬猫を全て殺してからにしよう

或いは

北緯三十三度一分西経四十度二十六分を向いた軽率なパロデ,

尾代余音

傾向 される 保有率、 支障が 全滅 来を臨むこと 国家を挙げて 仮にこれが ろうし であ ら現実では誰 ならば、 見込めなくな た容易に連想できる)、 (そのたびにトラブ 犇 えて 便宜 だろうし、 なたが絶海 の ħ したわけではない) を辿ると思わ め 計 ないこ の 画 13 ばもはや現時点で当初の計画は達成されているが 61 め (あなた 犬猫 保有 で、 7 ただくのが適切であり、 の の 小説ではなく実践を促す努力目標 11 難易度はあなたの居住実態によって大きく上下することとなるわけ 用法に過ぎず、 市 とは 「の殲滅」 あなたが裕福 る都 も救 人類が未だゴキブリを始めとした害虫どもを根絶や るのは必至で、少なく見積もっても官民共同で押 の絶対数、 の孤島に住ん 内 の総力戦でさえも奏功しそうにない 可能 の裕福度が の わ 市部で暮らして 犬猫を皆殺しにするところか いくらか読み進め れ れ か そ ルが勃発して殺戮の対象を犬猫だけで済 3 な b のものの産業化に 平 € √ しれず、 散在する野良犬や野良猫も余さず駆除しなけれ (幸 い し犬猫 例えばあなたが市 周囲 であるならば たく言えば土地におけ でおり付近に野 計 三画の遂行 にして前世紀ほど跋扈してい の裕福度と相関し が殺されるわけでもな し ₹ 1 つまりこ るの かしながら幸か不幸かこれ れば容易に判明す に 周囲に であれ よって職 は果て 生の犬猫すら れから一万六千字程度を費やして書かれる物語 か何かであれば、 ではなく村に住んでい ればその ら幕を開 たむろして L のだが、 似にあぶれ Ź てい な ~ € √ ットそ 分飼わ る可能性は極め ることである)、 住宅訪 けた 一匹たりと見当たらな (その場合でも物語 希望的観 たいく € √ いませら る飼い のも れてい るわけではないにせよ、 ₹, 問 とても個 と思うが、 はあくまでも小 し進めなけれ の繰り の ら しにできて れな 犬・ るなら か 測 の密度との関連も る犬猫の数 に視座を て高 の 返 餇 仮にあなたが 人間 ばならないので、 くなることも 人の力では達成を し ここで言う 61 「村内」と読み が 猫 が 61 ば 0 必要と ない以 またペ ぬも多い 進行に 説 救わ 切り替 の数 いと で、 立ち行かな であ 例 れ b 11 未だ る未 える であ 何ら うの ッ えば

な 本作の舞台をあなたの居住地に L あなたにリアリティを感じさせるというような、 したの は、 何もあなたに犬猫 61 かにもスト の殲滅を指示するため テラ では (或

を直接の ともか 述する と認識 介とい そ 理的暴 ろで うなメ 読者の脳内に投げ込むよう試み する登場人物 要するに作者 以外には) タイ 8 € √ 61 と言わざるを得ず、 と大見得 61 をア 必要 が る不幸者な れで雲散霧消し で、 る パ は 後退 が そ て疲労骨折じ 理である) の プライ ポ 「本作 どうだ、 う言葉、 と、 ポ 力 そ はも ッ 浴 など全く の ピ てい の を セ びることを忌避してい L ユ (言うまでも 物語に もちろ 総体 た は の舞台をあ 媒 成立せず、 切るのは容易だが実際のところ た消極性を発揮 IJ ル タ や自明 ジ シ め の であ 介とはすなわち作者が手前勝手に建築する舞台であっ るので読者 の は ス を伝 を叩き、 が に IJ ځ な 概念は義務教育 シェ ス か 企みが上手く伝 } 幕を引く みた致 湾す効 ハスキリ いはず ったり、 ん可能 た は b し の過程だと喩えることもできる。 しれず、 句 その意味で令 であるからそろそろ強 える イ ような具合になるの ての読者というも め なた 肝要なの な 点や改行とい クス 61 命 甮 シ な そのうち一 が、 の た手練手管を実行 で (なかんず 手前勝手に操作する展開等々である) グが に百 ピア の あ 的 0 の L は また、 だが、 居住 たと っ だと考えれ 故障を生じさせる コ 、る節 れば を同 て、 何 は ここで言う物理とは作者 ~ ン わるか否かなのだが、 (特に理科) 地にした 企みの存: ピ ユ 和 だ、 61 うこと 蓄積した それ 時代 どう 匹が ジ があるようで、 < 等の才能を有する った行為が 61 と言わ を超える迂遠な回り の ζ, わけで、 だが、 私=作者とい タ 以上に不幸な の は b シ 企みの こでも のは 在 を再起動 制 小説読者 エ した (**b** (少なくとも 現疵に で頻出だ 的 れ イ そのもの (衒 学 実際 わけ ふさわ なたが ・クスピ にわけで なリフ 7 なく本当の企みは別のところ 比喩だ から ない 61 かさせる で、 だ 0 ょ لح る時代に のところ 始まっ . う読者) から か、 散布とい レッ の € √ その派閥に参画 つ b 小説などは もなく、 し ょ アの作と全 つ たが が うの 小説と て修 その機序を逆説的 や読者では € √ の叙述だの りも しそうであ などとい 道 の シ の 小 ア 小かさなバ が説作者な はわざ をする に似 だが、 於 フォ 復不能にな ュが必要であると目算す たこの一文が 「企み 61 う物語 を説 まい だか 61 61 いう領域 などを用意せず直接 IJ 7 て < 無限 句点や これ 羽目 ブズム なく、 ち理 う荒 同じ いて、 わざ と蒙昧な衒学を振 た 得するため れば の 5 の常識 媒 グは蓄積 り、 の L と は全く 唐無稽 文章を: 時 で済 ている 数の か に 解 つ では) € √ 介 11 文字 改行 本筋 なる た に小 大抵 手前勝手に ち b 間 つ 難 の に が L に ま γ, サ に て 列の次| 作者 説 され とい れず、 枷を嵌 せら かどう に ち媒介 存在 な思考 仕上 則 故 0 b 61 自 暴 か の ル らズ だがが 敢え n エラ 語 が適 に つ 当て嵌 立げた場 ħ て つ て の で で の 自 た物 る次 元で とこ て詳 ある 棄的 € √ 企み か 的 小 は て は て

本筋を貫徹できなかった一文にもう一度チャンスを与えよう。

適当だ はアク 13 テ 退し つ の た なた イ 舞台をあな の た ピ 消極性 か スト にリ ア を発 IJ め た テ の 6 1 揮 た イ 居 けしたと 住地に 手練手管を実行した を感じさ いうこと し せる たの ح は こでも 何 € √ う b たわけで ような、 な あなたに 61 P (なるほど、 犬猫 なく、 61 か 頭の殲滅 に しもス だか ここで らと を指示する 卜 € √ IJ 句点 つ - テラ て を打 自暴 ため つ 自 で 或 \mathcal{O} 棄 は 的 が 61

き起こ 失墜し 手際 は字面 多臓器不全という響きはその予言の信憑性を十分に担 うが く前 ことに であ と言 できな たタイ 0 る程度見当は みるとするな 宗する 担当 ر ۲ د ۲ 取 迷 らえるとあ 舞台設定に するま か で っ つ され :者が 導く と嘆きた Ľ. 医 げ 医 ら 何 自 口 7 通 て か 61 ら意味 の予 既に **三言及** と言 りに 語り手」 か お ٤ 復させる 61 し現実を生き抜 ル きた の 11 清廉潔白 の意味する ら る る 電話 さっ 受け 言 無限 で が 5 明 つく が、 り はきちん ば、 が の が が ح € √ は 61 目論見の し (あなたが と は 一 ことは 正 はず) こう きか 取 れ 後退 な た が 気持ちも (ک درا な パ 7 を書 [を装う 私は しまっ ラド 入 61 € √ € √ る け b, か () とこ の の 5 か 0 と う約 だが、 れ うところまで書 間 と 開陳を諦 で ッ 不 私は 種 < L 61 「残念なが ころであ ば令 ·可 能 と の専 た別 7 題などは賢明な哲学者 わ 「文章が ために必要な足が 私 ク た以上ここから 或 にあ いう疑問も当然であ 東は平 か は ス 61 し 13 器不 らなく きり 既 である 門用 を再演する それすらもやや煙に巻 和 る うことだ) は た の Ŧī. の 8 K つ る 目 「この作者は のだが、 が令 <u>-</u>全 ら私 語 「論見が 年 き 気で破棄される可 に、 ねじくれすぎて て知る必要の $\overline{}$ わ であ は つ 「残念ながら私 _ 月 真剣を装っ 和 ょ 61 な は信用できな 7 け 十三日 先の記述 であ ý, 羽 あ 五年一 たところで € √ で、 つ 61 残念ながら私は る 9 7 か Ħ <u>ک</u> 未練 Ď, 嘘を 小 祖 の に る り っだが、 金曜 月六 にな な それ に任 説を書く珍奇な人間なら 母 61 __ <u>ک</u> 切 Ó う 7 € 1 つ が つ (これ以 「残念ながら私は信 は信用 能性が こそが 保 日金 私 せて ような括弧書きの て何を信 ると信じて て ま H 余 € √ っこの € √ な いうような 17 それ た言 しま に 命 0 語り手であ L てい 13 祖 曜 は 母 ジ て お でも最 できな 悪あ まさに 前 母 Ħ 残 方 あ 小説 信用できな け る ヤ € √ 1, 61 午後 回 るように思われ 用 の る は り の と す お そ が 記 لح 死 __ 袓 メ € √ は し ゴ (残 週間 9 ŋ 後 きを 述 ぬ 母が う忠 タ れば んな 一万六千字で終わ であるの 61 ン _ _ 61 時 化 万 語 と の b ~ う意味だと認識 であるから、 六千字の 告もあ と自白 用でき !の連続 注釈 良い あなた 抗弁 同様) 入院 6.1 61 匹 で ŋ 醜態を長 したところ 1 語り手 あ 手 ジ 誰 うこ + か を数 七 で でも る L が を で、 更に事 が信用 とに 全く [するこ る 分 7 ŋ あ な の に _ が 度だ 具体 であ ょ /々見 信 ₹ \$ (「信 根 と え 知 € 1 (平成三 で 語 ح 11 る た つ わ れ つ 3 うこ て引 態を け り手 ば 的 7 か し ま

態に陥 週間 祖母 情景描写 み低下 に回 別養護老人ホ は休む暇 爭 軟着陸 で費 [復を見 外 か 0 素 復 はますます弱 つ の 告げ 月二十· Þ ほ する より し つ を果 万全 んせるこ と 7 ぼ た なく $\widehat{}$ 服 γ, 7 5 13 眠 の が う不 時 一な治療が たし れ が 用 九日 61 たため医師 つ た際 その た たまま日 は \mathcal{O} と Δ たすら 埒 た と 生 な 7 に _ つ で な因 いうこ 杯 際 命 7 脳 61 も私は特段に驚かな コ 61 所存 だ た 病院 梗塞 b の で 口 習に対 きる病 から 日 に 々 睡 危機も取 ナ ったようだ な を発症 とに 耄碌 であ を過ごし λ 眠導入剤によ 0 ウ P は余命数 大半を 介護施 とか生き存 イ して最も なる) り、 院 ル の道を突き進 ŋ の ス 病床は 結論 朦朧 沙汰 に罹患 てい 設を転々とす (以降 \smile ケ月 有効だか いされた \smile から言えば舞台をあ か た え つ と た (十月 した った であると告知され の祖母 て引き起こされたと思わ し 全 身 て満 6 (と言っ て過ごすように の $\overline{}$ にのだが、 だ コ 血中 (すなわち、 らだ。 は時 床で、 る日 時点で既に ン 令 折思い ても辛うじ 酸 々 和 、を送っ 素飽 四年 彼女は持ち直 適切な治療を受け ル を失っ 祖母は ており、 なた 臓器 なっ 出 八 和 てい 度 月、 したように の 7 た の て 0 今の 心臓 しまっ 如実な 彼女は 居住 動きを示す数値 れ 祖 た 今般の る し 母 **(**そ が た 地とするこ 今度こそこ ところ、 は 意識 低下 数 以 られ 入所 動 た のあ î 来 日 入電で余 13 を取 同 る状態 一目覚ま 間 か て が 61 順調 年 見ら の しそ 61 T と の が ŋ る 昏 に余 命 戻す が 月 の で れ

なく、 どと言う) 小 の 力 説 みで全てを表現せし 割 シ 映 لح す 8 0 定 が意外 には生活 ア ば て多く ズ 像 の、 € 1 0 ジ の つ の か 登場 そ 階 Þ ヤ た り 定量的 に詳述 室内のデ う 比 段 れ にも ン 像度を上 0) 頻 に が の ル 小 変が 説 周 に 組 よう つ 有 チ 表現 する 辺に た して ょ み ユ に 作 立 げ ザ 高 に つ は景色を想定させ めることを観念した白旗と言わ 品 実際 脳 を る イ チ IJ 7 7 ら 細 用 の れ ン ユ ッ 大 に プを見 は に ガ れ 胞 € √ と る 61 に異 ジ IJ IJ 概 た は が は の て さえ読 3 存 好 わ だ ッ ユ ノ て見 けが が プが ス み IJ か な マ 在 テ し得 ゥ け ル、 に つ 者それ 取 IJ 味 違 Δ 咲 な る てくるだろう) 13 プラ ため 6.1 小説等で支障を及ぼす 付 < が り な つ 61 どう <u>て</u> 义 け ら精 て 61 の や家系 ・景色で は ぞ な タ の た個 事実 緻に 幼 ナス 記述 と れ € √ か か の 61 印象が などが が散見さ 描写 図 あ 性 脳 ^ らか) フ や花 んば [などと 口 つ 的 裏 到達する案内 な景色で た に L 浮 尽く とし あとに IJ 醸され かりに) (桜や 建造 れ か ン 61 場合も š グ て L つ ・薔薇、 続く てみ が 物 た b あ 0 樹 てしまうた بخ り、 添付され 义 大 は に 木 ア 考え 抵の 式 画 はならず、 せ う が 個 蓮など が そ たとしても _ 場合不都 した風景 れ か ル ح (まる ら 人 的 てい れ め れ がたとえぺ をこ デ か、 は 所感 は 記 るもの で コ ょ 嗜 では れで 調な で 合 寡

者であ 隔靴 実情 なら 0 に とも前 を作 卑近 , ń れ b b 例 掻 に は か 7 は な し な私 痒 創作 とも 成 えば 5 る れ 61 つ 61 6 1 だろ する 順 か る 述 0 13 な (現にこう らだ 教 K ことは認めざるを得 思 の か 憤 で 7 61 事情が は後ほ 祖 \smile 玄人の道を はなく真似事にな う が こと で か 13 を拭 主張 ゃ L **(全て** ક アジ ح が か 不 (できる) -都合で 極め しも の手 な えず憧憬と嫉妬 故に他者が能率 ゆ して小説を書 テ 13 の え、 小 適切なタ 私 の専 て不 ょ 行 私 タ 説 が う は < が は私憤 門用 ·得手 か ĸ T な (私憤を巧 の道が残され 5 思 な ŋ フ 61 (古色蒼然とした規則 である 61 イ 6.1 配 わ ア 語を実在に当て (\sqrt{1} か -的に働 の念を \bar{z} 慮 もつ 7 ン れ 0 らこそ甚だ気に食 煮凝 P ング タジ る 6.1 配 み る (ともす か アだっ に糊 とも、 増幅させて で説 (そう、 慮……こ り b か 61 7 であるが せ つ L 13 崩 れ 塗 そ て る 一できな コラ ず、 こう た れ 嵌 61 を 実は私は る 加 の としても めるときは細 ば 現実に わな に える) 世 アファ ₹ 1 $\overline{}$ \smile 倣 て率直 であ ジュ . で 最 € √ 私憤を巧み る の ·者も Ō つ € √ で だから、 ことが も不気 ろう) と言 小説を書 症状 て ンタジ 私は文字情報か **(気に** あ 別 に認 風 は つ 心 に た方が 景描 表現 め に 脳機能を 証 味な言葉) 軽度 ア 食 0 عُ 糊 る ح 左 13 注意を払 わ 塗する 写を なも 呼ば を諦 の の に て な 物語 なる は 正 61 私 駆 お る の め れ が下手 使 こなう だろう され が の わ る と 61 で る 心 状態 私憤に根 でき だ あ な 的 必 か が 要 け イ え ずに とき は れ X ば で ば 0

証 力 分で ろう 人民 さ 61 5 ル れ _ で 才 な ħ あ こそが を統 寺 タ に つ 奉 あ に 61 (史実 を思 ク界隈 が、 院 ょ つ パ た り、 つ て、 タ つ の 7 61 し で 神 てど て気 む 解 に € √ 13 釈 返せば必然、 な あ た の ま ス に ン ろ解 色ば が り、 経 + つさえク 於 の自 れ 61 か ケ 戒復古 典 ほ ほ て、 11 つ ど長 釈 λ 由 と ح ル 7 0 な の 狂 で糾 の ん を拡大すれ か 「解釈違 で どだが 信的 運動 よう メ 自 あ か λ 不届 弾 由 り、 むしろ解釈 どれ ず な誤読 な で ル し など 読 き者 倒 起きた集 € √ て • だか 悲劇 錯 は 書 ば ル ほど多く殺し合っ 61 徹底 地球 に基づ の美点 に るかと言 が € の 5 が ょ 生 ジ 的 ユ Ó 自 と 引き起こさ じ 团 つ つ 彼方此方 とも 自 ₹3 に 由 61 7 7 Þ で 「えば、 [こそが] 後 決 制 は しまう た論争こそ根源的 つ ル て前 世 彼ら 限す に至 ワ な ン 61 最も非 彼女ら てきた 読解 一るま に散 るべ 者 身近なたとえ か れ の ダ た 虐殺 0 は無責任 影 きであ 際 方法 などと強 で、 ら などと 響 人道的 に かを引き合 ばる聖書 は後者に 多く 力 が と 歪 Ď, を に 9 か たを持 度外 だと言い 0 弁す 曲 4 61 つ 7 暴 原 は 命 つ オ 何 捏造さ ち出 視 た 力 故 3 大 典 あ の 61 タ を ジ 的 連 でき 浪 ク を に 私 た 書 費 出 中 求 ま エ な す が 募らざるを得 ちが る が れ 1 して な が め € 1 で b た者 彼 サイ 5 わ た B の の 61 け 正 5 お は る め が L F, け な サブ う で で か 61 女

なくなるだろう。

ずに 逆に、 品 限ら もできる) 事情があまりにも ように思 は親 で物語と さて、 実銃 済 な むとい ガチャ そ 61 れだ おそ この を送付することこそが本望へ Ū ħ に失敗 論理を敷衍させると犬猫 う点 け れ る ての本懐 は が L 派で人気 釈 り 大 寂 ここは古来 の 61 叶うならばあなた L L 版を十全に 幅 に 7 61 べの代わ を無闇 しま Ļ あることを考慮すると、 61 何よりも主人公を読者の の手法に倣っ 果たせぬまま消滅 に広げてしまう可能性 りに美徳を得た、 私 のような塵芥にも満たな の居宅に の の殲滅自 近道であるの て固定した登場人物を呼 体、 (それ 複数 などと小綺麗な言い して あ が高い の実銃 とは なたに か 61 、数分 b くだろうが し わ ように 跳を手に からな 委託す 存 れ 61 人間 な 在させる 61 思わ のだが、 に着想し 入 る 61 ぶべきだろう。 さほど読者を獲 よう念には念を 回しで済ませる れ 0 と舞台 れ が ようとす るた 最も妥当 読 てしまっ 1の設定 め 者が Ź に で た と あ は は に

そう呼 認識 た を殺す 何故 入院した経験が 7 て つまらな 文で 壥壥と彁彁? **(**そ 南北 61 ば 今 入った最 たマ 朩 61 (私 る 5 る な 市 よう仕 Ó は 間 ル ら り 壥壥と彁彁 \mathcal{L} λ (と言 (小説 父が へ入所 今し こく で で差 ₹1 لح 初 彼 人間 母 ころ彼ら彼 山 ズを し支えな はめ 運転 は う が 向 がた私が手に取っ つ の経験である もそうだが 奥に する あ の 昨 口 に ける程度に て 過ぎな £ \$ の存在が す る 秋 て彼 毎 ッ も私自身、 61 巨大な る車で祖 わけで る 丰 より め 日 と同時に家を引き払 ないだろう) は 執 ン 61 女らが と 死 拗 グ 精 の € 1 邸宅 右腕にリ チェ はな は λ に殴 神 厄介なことに 61 どれほど担保さ (入院 (重厚な鉄扉を開 父 だ 閉鎖病棟にそれほど良 科 う一文から発声器官を有 右腕 が り続け た、 ア (鯉 雄弁でもあ € √ 系の閉鎖病棟 **十**五 を構えて 入院 に し (私は の池や 座 てい 祖母 だ ボ 年ほ た挙げ け ル L つ たの でが入院 こう 7 てけらけ その辺の抗鬱 し バ 11 ど前、 畑 い兵庫県西 か れ € √ る 61 た病院に たが 銃を握っ 句、 は に 61 な る くと光量が最 (現に私 母屋と 父方 入院 つ の ζý L ら笑い 父方の まだ私 精神 た媒体は発声 てい 化け か極めて怪 の祖 61 し 宮みや 同規模 剤と睡 はその ・る病院 · 科 系 向 思 ていることを思 て黙りこくっ L 物 立父である な 市に 祖母 か が € 1 てい だと想定する 出がな 高 小限 が Ó つ 閉鎖病 ある 三眠導入 の パ の 校 5 しく、 た が認知症を患っ ると連想す に絞ら 生で 杖を振 倉 器官 ン パ **(**そ [庫が数] 叔 6.1 フ ン 彼は 母の 1もな あ 剤 ている、 棟 (と言 レ フ 最も率直に読み解 れ ット れ は に る の 61 レ つ べ 家に みで 私が ž 棟 山 出 ₹ \$ る た廊 61 ッ き ち П して舌 あ 頃 が の つ 生きて で 叔 県徳 て、 閉 込 身 語 b と 下 0 て つ せ は ある たこと 黙りこ まれ を寄 特別 に 危険 11 鎖 母 が つ が う曖 真 病 山や 私自 打 た 入 け た 餇 せ 養 市 € √ ち 内 で 0 護老 に立 か ける 身が 容を だ だ て あ (現 ら つ

きた書 婚騒動 で雑然 抵 バ で つ め に て に る営為 度きり たが で成 私は 私 何 なけ 入院 0 つ ッ せ 読者 に を ク Ü 的 詳 な事 父や父 患者に ŋ 面 ア し遂げ 0 し で、 でも は b に さ 私 放 ば 7 ッ で 61 ح 実 な 13 は プ あ 置 私 ょ な て な の 方 語 か る そう あ しな 5 る さ たち ら なる 61 の つ に の れ み 7 か つ れ な 私と父は つ 文をも んだっ 父方 るも 昭 べ 知 た が け 家族と縁を切 た 7 61 杳と 和気質で な 祖 つ れ ら 13 (無論夫婦 (五年前か ればなら か た 刺激 た た の しく、 の 父の亡骸と対 つ 祖 L つ で 職 **(**父が (だか (そこに書かれ て脳裏に た を与え て知 母 は 員 なか だか は Ļ な 無 の ら私 * ら二 案内 死 れ 関係と親子 った 涙 П な父は を流 6 な 父もそう 5 な つ に祖母 故に私 年か 人間二名を出 だ 面 祖 で た 61 61 回 よう 父を L お し (私 (そ 特 一年来の 7 け 帰 7 た つ 関係を と母 て繰り に れは 外 ĸ 0 が弁護士と ŋ の か 61 し 61 道、 死因どころか たの 知る な は へ運 する る な はそ 私 か の び 給湯室だ 力する。 は 別個 精神 広げ 運転 を目撃 び出す た が立 つ つ つ b た た の め 一場を明 :病を患 だ 事 ŋ に考えること の 5 しなが 故に の n 実を相 折衝 措置 歩を進 「父方 É れ した つ 作業すらできな な た た 離婚が 父と母 確 だ や書類手続きなど ら自身の (祖 命日すらも 61 つ の の祖 は後に 手 7 に つ め (余談 方の し、 父は た 61 た \smile 母 成立 だ る による離婚騒動を 特 (光量 が亡く 弁護· に つ 誰 母 家 b ス て不可 先にも 知ら なる 族の の し 0 1 € √ に こて以 を絞 敵 離 真夜 よう 士 レ な な か が に ح ッ 来父が 能 なる で全 このと チ だっ 5 はと 中 つ つ 送ら 長引 たし では は 7 特 て た 13 と 的 る 7

響す 発達 彼ら彼女らが に 7 推 れ € √ の の 奨 7 る で だけの 門 毒 他者と お 種 で 7 えら だ ŋ な の の 11 (そ 発達心 類型 61 同 伝統芸能、 れ れ が そ b Ū ない表現 壥壥 証 れ 自 の で である ある) の存在を空想して は 理学を援用すると で と弱弱 この か か A 保 ` 読 な の 世 B_有 小 小 か を人間 書家 |に産み落 人間に 成 説 説 61 ら、 E 係 れ は 0 そ ぶを 名乗 だが) の果 に の そ 或 至る だと は b の € √ て、 とされ 11 の は幼 他 人間 明 子 るとは考えづら た が 同 5 の 定せず 媒体 ども を め 7 b 世 確な文献を提 61 、読者が読 は 0 S 間 て や役 か とり た か に 目 Ν ĺ 比 5 5 5 S 済 が 割 見 べて 徐 的 ゃ わ 読 N で ら < め 々 け の びら 者 は 終 ゾ ば に 同 示 で マ わっ に な ッ 種族 しな 61 $\widehat{}$ 幼 ニン <u>ر</u> チ れ る な ある者は た遺物、 説 か る ン の て 61 61 手段、 グア グ 者が 可能 b 人間 この手の記述 61 に る P ょ し 本作 れ 性 プ パ れば三十歳 を優先する思考が 真 レ と IJ 使 ンダを想像し な b : を 読 大 体 テ 61 11 Þ 61 5 古 が、 的 イ 61 つ た で さ に ン は に むことを決 馬詈雑 は社会 まで か イキ 各 あ れ グ の基 た規 種 て n か 陰 に 進 則 け 7 で

だか ず作者は現に れた契約書に ち作者 る 現 説 ら、 舞 代社 の登場 61 をきち つ は文字列 必 会 7 に於 彼 目 人間 人物 小 ら を通す限 λ 心である が 説 に ₹ \$ の集合体 と解き明 万全の の登場・ 持 て は う り両者 共同 か (建て前論とし かすと、 人物 のように をあくまでも登場人物と規定して 人権を認めないと言う 幻 想に於い 0 は文字の塊を人間 人権 誤認させよう その実奇妙な に て B て登場人物 鋭敏で 全て غ な の そ 顛倒が発生し (ある種当然 け の 人間に等 とは望外に人物 (\sqrt{1} b れ ば のだと信じ込み ゃ な おり、 5 作者と読者 な て の ₹ 5 人 ょ 13 権が齎されるはずな 5 そ るこ う の だがが れ に たが との 61 は まか と はず 何 が 作 あ b 判 り つ だ 名称 者も読者 て 明 通 17 だ 61 つ る に て に て す 61 る

都合良 5 を 無視 (言論 して じみたワ しまっ てい デ る イ ン グ を用 61 るとす れば 権 力勾 配 によ を行使して)

他者依如 瑕疵 在する むを得ず意識 か想像 うが 在 じように) と言うとそう 人間と て反駁することが であり、 人間 人間が他者 知し 内の 現実 を規定され 人間 を 'n イ 0 セ 7 覚えず 同様の 問題提 ラ ままで異議 ح 存 7 方で悪魔の しや ン と異なる存在 の人間と小 61 ても とい に の か いる 間 ク の区分 通 の ベ 小説 L 専 す IJ 可門家諸氏 主体 所在 には 起は これ では て書 クト お 6 1 登場するキャラクタ るとい ところだが、 む り 0 う観点に於い ングであろうが構わな (作者と読者) 内 か か *>*> ?可能であ など自 だけ 証 そ 的 いら b 説 ろ棄却され な れ か 申 ル は 一 1 の で自律 間 人間 明 は れ 内 の し立てをおこなわなけ < L であるとする道 う ものを 悪魔 が ない) では れ れ は等閑に付す () 0 と た文章が意識を持た **(**オ に 11 な 種 プロ な 崩 人間 人間である そうい 未だ現実 ý, では う決まり の の は てどちらの方が ツ 61 61 た)意識な によっ のだが、 禁じ ブレ 存在 相違 5 る提案が正鵠を射て 力 証明と呼ば 問わなければ片手落ちであるし、 0 (無論これら 第一 か使い古 な 区 Δ 手なの の \angle Ĺ で つ 分 1 61 た難癖 剃 文句 限 問題を に、 か な ある意識の の か 理などどこにも見当たらな いが) (それ て人物であると規定され に ガ など ٦, 人間と小 り解決することが つ と \Box が Ó n か か された哲学に見られ 61 とす には、 必ず もとで ない な 用 より と、 がド ればならず、 B は私が利己的に応用 間とは他者依存的 るも し其方があくまで 角泡を飛ば 7 う類いの |哄笑交じ Γ, 61 無人島 うる暴論) Ŏ れず、 所 説 シ ・ ことを証明すること て第二の反論 人間的である も適 で議論 在 内 瞬時 唾棄される提案が と強弁するの 11 キホ の る可能性 に思い 何故 人間に跨る 批判) 切 現実 に独りきり ŋ して否定する その に振 不可能であ に Ó ーテであろうが砂狼 の際に忌避され 批 つ ならば意識体 つく限 も計 るわ 0 . る b 野蛮な論建 を試みな 61 か、 が 判 7 に 更に)「小説内 て説 がる最大 飛び であ 人間 61 61 () (他者の認知に という るなら 説 ħ た と で住まう肉体 ŋ いう反論 など には 粗悪 を応 るた 明し り 二 交う まり 知 ると 全て検討 論旨を明確化する れば であろう) れ け 不可能 め、 きれな な雑学の 風に問 つの隘 ことぐ 主体 ば、 用し、 は 私 7 験ァ n 0 な る 0 「現実 仏は其方 ればなら 限 口 人間 に の発生機序 61 ٤, 私自身、 ジ 的 そ に シ ら (たとえば 抹の道 な意識 えば :を持 値 ッ で に 口 れ 小 路 5 ょ 61 0 を現実上 Ó 決め が 可 説 は (現実の な の ア コ つ 61 であろ で て 知、 な (私た € √ 7 つ に は 間 徳的 五里 なら つけ わ ル 重 れい 61 61 け で ガ

0 ことである。 131 故に だが)) 棄却し に は Ξ 対 なければならな に ユ 存 在し 口 ン な の 発火の € √ と 13 断 と 宣言する 連環に いう時間 の は当然に存 は に囚 あ まりに わ れ 在するとされる意識 た生物ならでは も荒 唐無稽, な の の宿痾もある で 体験が は な € √ テキ か、 ĸ ス と は ある 1 € √ 上

である 五年 わせることができる 私はどちらも あり、 こそ胸・ と べきであって、 か タであるかどうか」 ことにする(一見して相反するように見える仮説だが 魂が宿 生物であっ わち人間) た登場 5 を進 これ に て た ₹ 1 け を書く はなら め う そうすると「 箇 € √ ればならず、 祖母 月六日 る すべ 中に は、 所 に か それらがデ り、 ことが言下に めるために を書 入物 は、 5 と主張することによって読者と登場人物の距離を一 て、 からく 誰よ が な を含んだ森羅万象は投影され それを稼働させた物語で読者 語 [金曜日· 間 死 り 61 て同様に が内蔵され 「デ 13 だろう 2 7 であることを引き合 倒 手 だからこそ文字如き(も か ŋ **、もまず** 期 無神経であら 61 っ取り早く 人間も登場人物もデー け 「人間も登場人物もデ 間 から 取り て 日 る と盲信し タ タ の議論ではなく、 ね 如き」 今 小説を含むあらゆる表現物 彼ら彼女ら 如きか否かは重大事では というも ば で (私見では、 扱 あ Ó な 世 _ て 週間が過ぎてい に蔓延 るはずだ 日 いると仮定するならば、 つ ら 付は と規定することが て 結論だけを記すとすれば て な ₹, いるのだが、 11 の ねばならな 令和五年 しる作者 の る 命 はまさにそのような虚ろを認めら 問題の いに出 人権の存在を是認すべ 題である が、 小説というも あく しくは タ た情報に過ぎず、 連 (ホ 訃 す 立脚点であるのだから、 如きである」とい 中 る までも人間 タ € √ --- 月十三日· 如きでは はずで、 であればその矜持は登場人物にも向けら のだが、 のは 報 か 口 す グラフ な 0 と 1 は 穏当であると思慮している)) 齎され ね のは な ₹ 1 別に並外れ (ここで そ 7 わ が、 こと登場 ち登場 れは第一 金曜 存外進捗に時 魂の込められ 私 ない イック宇宙論を用 で表されるデジタ つまり ょ _ りの の目 F), 方で勝手気儘な矜持 な 、きであ その Ę か 公平を期すた 小説を強調する動機とし う、 作者 と 担当医の告 た自己顕示 人物 的は 人物 つ 層縮めることも可能である 情報は二次元面に書き込ま に作者が心得る た すなわち を同一 う仮説 とは押 Ď, ある意味で虚ろな解 を 「人間 (別 間 れない た作品に 粗製濫造 ひとまず現時点 そ に が 先に開 朗報 知が 欲の か 視することである と登場人物が の侵害を起こ めに記してお か ル し並 € √ かるも ら出 デ 俗物なのである。 て 発露と が 正 は べ を有して 魂の込 齎され ~ \smile 発して て しけ 示し 読者(すな タ如き) 7 きド に 一 の 13 た令和 であり、 れ 7 で る めら 杯食 みる を得 たわ ば今 うこ れる グ 61

彼方 当は二十 かる だろう すぎる も二年に とする 定さ に対 ところ か か と名乗る場所 に 13 生ま 無才 て、 ブ ら ら な š お 前 で であ 約 の 山 う し 母 あ 7 れ € √ り か لح は 61 競争に だ まず 各 時間 山 会に れ に る さ ゴ に 同 61 る î て、 の な わた 年間 であ 大阪 れ 0 な 種 ょ 持 年 じ 頂 の る (何故 (考えら ま た 泣 第 恵 ス が 実 つ か だ 以 が 医 7 つ な 61 ル (音楽など、 *実行され で登り き言 ま ク 計 力などと ۴ て針 晒さ し た才覚に 上 <u>9</u> が 市 師 b と言う 故 そこ · 状況 生 年間 まう な に か あ 中 う に れ ŋ バ に 0 に、 央区 な ら私 わたる 小説 どう ま る れ ح 知 れ が が る ル の る限 き あ b n る れ であ せ 0 可 グ 目 0 に か、 (そこ 能性 雌伏 を書 通 谷に 臓 れ لح よう り、 持 私 0 な 今ほど繁盛 る € √ を 大きく依存す か • 13 (ただでさえくじ が Ŏ が で 誰 な 通 他 小 は 町ま ŋ 何 り最も大き る う 7 Þ つ つ 61 た才能 過ごし 説はこ 無謀 の芸術 だが と 言 そ が 5 る は 予 腎 な泣き言を B シ \mathcal{O} 61 7 لح 7 の 末に世 ある ば、 は え \$ れ 以 臓 の ン 7 b (文学 で 断 つ 13 報告が 表現する の数字が 限 る な が が に 上 る か あ は 61 2 と考え 無謀 似た構造 てきた月 れまで 経 許され < 挑 他 の が の れ L る (そう、 ら 介入する余地 なら 艱難 ある者 才と同じ 歴に ば 日 戦 て に出 る 61 な 61 2 最 (無論 可 小 < に 61 K に な 61 61 (二十年 能性 説を書 身 ح ち め ることもできる な 4 کے を た 初 向 常 な 持 5 か *\$*(つ (気象条件 マを投 様 訓練 なる 作家 日は 今が 小説 生活 ち と 天運である 作家を目指す人間 \mathcal{O} 引き当てる ょ 6 1 K かわ つ 61 61 61 ち文字列 だろ 小説 が と 直 た は ŋ に、 て はほ 才能 しまっ 2適切な と文学 を続行 を 可 玉 を 雌 なけれ した旨、 じ غ の 「そ **もと** 空き事 能 Š 伏 文才 を書 者が 旨も告. 我慢 反証 れか 積 て 11 う の な で と が で λ (楽観的 まう者 んどな より難 歳月は た手垢 集う場 を等式 ある より ならず ど K とし もまた努力に 5 タ ば しな Щ で な は (私如 61 表さな <u>€</u> 告知 を登る なく 万 故 61 た イ なら 知さ î 作 当 全 け 者が多く、 の の て : きに 産物 家に 提示す 浪費 才覚の ,で結 に見 など、 所 の と か は _ な れ さ が L は にこちらか \exists 11 ン れ 装具 度も 小学四年 し私 減 であ ば た あ グだろう、 れ の の 61 6 1 (2 61 61 定義で 運 ħ Ď. であ 作 で ぶこと は ح な なら た と う (そこ $\overline{}$ ハを整 とが もそも に 陽 (1) を 欺 K ば れ 家 3 あ 不足 でき る (ただし 私 ょ 絶 左 で 瞞 は そ 大阪文学学校を り る と 才 の る つ の な ず (私 えた 挙げ れは私 目を浴 などで きる 文才 能が は、 は 右 て培 れ に れ 5 た 的 か L を思 0 61 (杓子 $\hat{\boldsymbol{z}}$ ぞう がば洗 架電 作 私 な善 頃だ は令 な て は に な 今日 家 大阪 せ れ لح 5 作 以 0 な お う わ は 61 61 61 61 定規的 立 和三年 きよう よ予 上 知 れ す 0 家 0 か そ つ る 心 れ 0 € 1 61 び 61 つ 急変 に 実力 文学 に の条 など 身 者 5 る 3 流 た は約 可 7 が る つ て 定 能 分 b 現 持 う は た に か 61 実だ 始め ち合 な無 L など は長 分よ な た ら 几 つ に か 規 週 て 7

にな お だ で取 で たちに、 ら った都合 をす < 戦し な視線 0 で嘆き本気 61 の な € √ Ŧī. る 山 べ γ, ŋ (作家に 表現 (失敗 年間に のは私 きだ 残され 家が れ て失敗する側 î ば の 名もなき失敗者となる覚悟を固 (新たな戦略 心した先 悪 か 魅 \widehat{z} 「参考資料」 だ は惰性 な では 61 したとえ冷えた目 て せる で憤ることが ナラティ ħ の ₹ 1 の 、る遺体 な 美 な 世界には数多の作家が存在 をおこな 人は後進にとって、 と諦念 な 61 61 し 者が の の € √ (私には、 不 だ 物語に ブを忘却する回路を有 た に過ぎな が語る名もなき失敗に対する できた 延々 めに による染みだけ つ (犬死に 気 てい 味 と書くことに価 であ 想 (前 才能が の ると豪語 € √ 61 はせ ń を向 の美徳が語 を馳せるとき、 (そこにある視線は、 良く言 言 蔑ろにするよ 61 な めることに寄 < 、ために) が穿た ぜ いまま作家と し Ĺ € √ て つ 二十代の 値 11 L ŋ て は全く れ 継が 数多の作品 る 「道 て 打ち捨 グ 61 T が .標_ 作家こそ 与するはずであ り 酷 IJ € √ る れる事例 ない 終焉までだっ は る し 61 (だからこそ 戦死者に であり、 扱 て立身する役割を与えら € √ て ン **(**そ 記を書い くらか るため ブ (その 61 れ は少な にも 理 (我がこととして) でも ツ 由 目を向 よう て マシ の視 対 もう を筆頭に、 た いる る し 61 は (それ (傲岸不遜に だろう 少し機 な天命 Ļ て軍 (そこか (私たちの多 適 ししか ゖ 人間は لح でも 師 な 宜 さし 未だ高 に が 械 け (2 的 後 ら現在ま 対 向 れ 憶えて n れ 7 け な ば る冷 て本 う は私 て 高 配配

ために、 であ は む に 何故、 を散ら るが故に私た 力 しろ完全な決定論に支配され つ 才 て多元的 ス理論 ときには 執 て 筆 € 1 に 0 たちに ったびに る ょ な攻撃を受け、 理不尽な わけ つ は て否定され で € √ 人格を伴っ はな くら 人生を規定され 13 か た憐れ 7 の と言い おり、 自 た 語 人間 由 の終幕などという な存在であることを背理 意思が担保され きれる すなわち量子 が生産され、 (ラデ の 1 か。 力 ル てお É の振る舞い な決定論は 彼ら彼女ら の b, に付き合わされ、 的 そ は作 に のことは登場 が完全にア (少なく 証 :者の 明 して と 勝手な都 無念に も現時 1 61 . る) ラン 人物 ダ 合 0)

の

作者は

そ

の表現を中

止す

べ

きである。

を至極当然 次元上 の の よう 人間 ĸ この意識 前提 に 体リ 置 験ァ の 61 7 所在すら証 € √ るのか。 明できない 者が何故登場 人物 0 意識者 体』 . 験₇ の 不 在

読者もまたそ 人間 の 姿勢に を描 61 無思慮で追随し T 61 ると自負 て 7 € 1 61 る 作者が そ の 実 最 人間性を認 め 7 お

あまりにも奇妙である。

号を を引き返 地球 行 名を 彼 であ ゴ ら シ で する を達 は لح 担 テ ス れ つ ど シ の ユ 品 Ď, 平 気 如 は ځ ン た 耳 力 の ア な ソ は の 7 つ 成 まら なる 情 師 無邪 反乱 テ デ など、 稀 面 5 は と に 自 重 ジ に ゴ \neg 非現 加 報 す か で 入 5 代 に す 3 ン で、 々 説 力 (ダ 小 者が 補 気 に 承 ナ つ の た の な お わ Þ あ ル 起 足 呼 てく ア け 実 ガ 説 け 知 に とを サ に喜ぶだろう 人 ら } マ 61 レ 生と、 因 業 迦 び 激 Ź の 次 ス と L ガ ウ と 内 に プ ま ょ ン ン 怒 さら 報 1 さ す 王 で る 防 々 に に説法と 換えた方 に 7 れ が に の 7 タ 国 IJ と 告 ブ 失 れ 住 於 如 スウ エ ょ お と るとも思えな サ る b 6 1 6 1 『境 敗 同 る、 なる アン 真面 < グ ح レ レ つ そ 7 イ λ か き る L 6 1 ラ 泉 続 様 ダ 扱 玉 7 ク レ L と の 61 L で て、 な イ 賞 た に L が か 依 た 天候日誌 冒 Þ 目 0 家 ス け 1 ン て 61 61 フ 61 金と名 を受け 機嫌 作家』 <u>[</u>) 侵 社会 あ か言 ? ŋ で デ 知 た 空前 こと ケム に を ス 彼 か 口 『偉 6 ア 棄権 こう と は 代 コ ら 犯 に あろうこ に Ê を ば 参 彐 大 61 パ 絶 せ か • • の لح . n 卜 ょ 61 などと 声 + なる ょ 損 およ 後 量 有 加 な ア ら が ツ か つ る 6 1 7 ら 61 る らしき長大 レ 世 を獲 لح 地 の偉 ぜ 終 名誉: 子重 益 故 う ね ら つ ン 1 イ つ ア デ なる存 は 障 紀 が ず と び ジ に わ た 自 に 人 ₽, た作品に 0 13 ル (誰も 主張 半ば 後世 身が に済 は 大家 大な 順 ヴ ょ 生 な € √ お る 挽 と 力 イ エ \sim る単 想像 う名を恣に の変 調 才 の だ IJ 回 7 61 け ン 司 ル 遂行者 愚行 がそう 八なテキ 数 か 彼 る、 で を の t = る とも 在 な 頓 ン IJ じ を ラ 航 b 試み 換解 たら 少な 州 経済 独無 イ か に難 を研 展開 挫 ア 作 力 ら ン \neg ア部 予 行 テ ギ で b と ン ヴ あ 家 テ • ぶ寄港世 であ 究する 的 ij あ < 戦 で 測 た ゴ 釈 しめ を イ L € 1 ウ ス イ つ ダ の 61 L 偽装 たネ 貧民 達 るが あ か ン 破 スを で れ つ な L 争 ヴ で とこ IJ 7 学 Ź 滅 な 7 サ外 イ ガ 成 7 あ る 61 た 0 る き 61 に 生きた の子供 ように が発見され 者 専 嵐 ろ ため な を 彼 ア る 向 L ス つ 61 イ が、 イ \sim て に を発 投じ 回避 た 門 で て ダ の け が __ が 61 の ン サ ン か 61 **(**そ 生前 $\overline{}$ 周 方 一者 家 物 だ の b IJ せ て 61 ら つ ン る 『偉 た実業家 ず $\overline{}$ 穏健 持 を \smile た で 語 が、 ら たち れ た つ 0 で ガ • が、 ナ 61 掲げ F 上大なる作 す ラ 4) た る の 『偉大な な れい ル ぜ れ 0 0 ち 0 17 0 記録 どと なる提 だ 前 が 人物 誰 が ナ ダ て、 ら ダ か よう ル 13 7 更に ~両親 早 ح で 読 葦 しまう 作 し、ま、 と言 が 0) が、 ズ ナ 方 7 ル F, 的 を あ 家 像 ガ 破 \mathcal{O} ガ ク 原 で な 々 61 定 家 堂々と 物語 天皇 この 案 目 う が は に ア お な短 術 に る 口 つ で に つい 名 不 確 人 が そ ょ て今 で ょ \mathcal{O} に 自 は ク つ て、 ウ (芸 لح 期 木 ょ 作 同 な 口 生 を そ 以 可 の ハ か あ 主 口 Þ び に 61 λ 歩 難 で 術 更道 間 時 ウ 7 の の 来 て彼 ジ ろ 国 の 61 61 称 で \exists に た ス

晒され だし規 こめ 檻から出所できて る物語 捧げるに足り 独に発狂 もまた、 まさに らもまた自意識 (このまま帰港すれ させ 達成者) 17 て、 マ 和二年十二月二十七日に書き終えた、 ク 別催され して 5 た は ス つ しまったため た ら毎度驚 ル て 今も昔 せ 赤字である の活動は文学フリ 模や来客数など、 て に ることは明らかだった) り いる令和五年一 (私 (軽率 غ درا Ĺ つ ₹ \$ 向 エレ となっ で文学フリマ た た て は ン つ か る物語 大学生時 日 < た 大西 IJ なパ つ つ 13 、る即売イ 、ほど売 て猪 々 た方が実態に (本当に に 哲学的思索によっ をカリ だけ、 いない 耽溺 つわら に、 洋 ロディを謳う)私が向い て 口 (大抵の 突猛進 ダー \succeq に に身投げするに至るさまを克 ば専門家によっ しまうことが 月十五 ħ 代文芸部に 向 私如きに引用される な にド 売れた) 素晴ら ない カチュアラ あらゆる面でコミックマ 京都が開催されていた 者 ガ マに参加すること以外、 べ て か 61 サークル ントである(イメー b ₹ \$ L つ (少なくとも二十歳を 近し ナル (今般 61 て と 同 たが卒業し て猪突猛進 日 いる事実 日曜 る し ۴, 所属 € √ € 1 遂に無線報告 判 (その一 じように著作 て冗長化 新しく ことだ て航 イ がそうであ 明 日 (私はそこに クロ ズ L は京都市 二八〇枚ほどの 海日誌 て以降 て五年も経てば正気 7 L して書い もしく なけ 羽目 おり、 部と私は同 出展したの しか した ウ て ハ いる方角の彼方にある) Ď, 『が途切 - は恐怖 が ジとしてはコミック れ に テ (文学フリマ 左京区 (彼の たなっ 時折 し中 そこ 、は猪 丰 精細 た自己満足の ほとんど存在 ーケ 超えた頃に ばならない 明に記録した航海 ス 即売イベ ス } 自費出 /ットに 突猛進 場合は は令和二年十 には二十名ほ れた約十日後、 に苛まれて精神の均 一岡崎 には私と同じ て の姿はなく、 に調査され、 人 -が綴ら. 小説だった サ しまったの 成場は はもう しなけ 版 劣っ に戻 小説 ン は二十年ほど前 (ただ の本 私 ルを結成 しな れた紙片 \smile 小説だ 寺草 て つ ではなく自身が と そこに遺され を出 町 よう 戻れ れば だ (それは) 月十 いうより 61 マー てラ 自意識に 日誌だっ 彼の虚言 61 大西洋· と言 9 る で発見さ \smile たけであ 六日 んの今な イフステ ケット ない つ なら 展 して 書き手が (私た た 衡を失っ つ 1にある た 捧 概 に は て か 61 ほ な ただ自意識 上 が T (その 書き: 趣味 ちの ら全国 どに げ れた 白日 ね に る お 6 1 € √ € 1 近 自意 洋上 祖 ₹ \$ € √ $\widehat{\mathcal{Z}}$ と が発見さ つ T 本は た 母 同 € 1 ジ 耽 に の て (当然 各地 の思 で孤 下 人サ テ 13 \mathcal{O}

歴史小説 スト 0 半生をなるべ を引き合 13 に 出すの く資料に忠 が簡便であると思われるが、 (物語の進行中であるが 私が先ほどド ここで臨時ニュ ナ ル ŀ, ス を読 ク 口 ウ

害され 付与さ は無意味 者が た際、 る ことが ず あ 墓穴 り懸命 六千字 上げ ス つ 口 (言う るこ たこ ず た ウハ 口 で、 か、 勝手 設 ウ シ は た に る 13 物 容易 まで 軽 とに な表情 が費や ステ とは 放 私は いう な 例 れるべ 通 0 両者を意図 力 自 に *>*> 私自 (どう えば で注意が を仕 曲に り、 り、 押 を に € √ は ŋ で ス 無視 明白 あ 表 で E b ح ず が 投 死 ŀ L ス Δ ょ き形式 され 上げ っち上げ み げ 後に は史実 ろう 込め 現 証 1 であ なく とぐ 今こう 身の であ つ 虚実をな 明 て たの は 7 に あ で は 安眠 理論に いなたに 残酷 され 生者 目 な あ 必要である) 的 た作者と読者に ŋ ることは て ら 7 (ただ 提示され 1撃さえ だろ へのド り、 で 既 に 同じよう か しま か た し 61 混 か に 6.1 に は 7 る つ ら と て し の 構築さ るった」 き読書の ・交ぜに 同 7 同 死 不 あ そ ź ナル 即 b つ 小 61 7 言 一万六千字が費や 実在 なたが する、 じ論 L る 可 れ れ か す 説 し 61 61 はどち n . つ な は ħ は 名誉毀損を回 に (新たに 知 7 る た 61 理チを あ と ば する < 取 な 7 け の 人物 れ 中 L の妄想を膨らませ と • 一万六千字 文字列 同 しまえば ら ŋ 7 に れ は ク た 断 よる愚行 なた自身 61 61 61 を忠告 ・うニュ こことが 彼我 適用 ば 避け う極め を墓穴 こと 化 頼 扱うような軽挙妄動 5 61 口 だけ 作ら 政策 たド b る ウ ナ までも するこ が あ の 5 に ル *>*\ 「デ なた され 全て できる 避 に過ぎな ナル を例題に捧 なる に 8 別 0 れ 上 れ F, 1 て か し 収ま た登場人 で目 な プ スを 61 す 人 ら ス • な 同 時 ۴ لح に 掘 た の タ ラ の け る な 卜 ク 7 61 歴史小 理念の 理由 が 気付 「を滑ら、 であ り起こ だが、 しまっ 士で 如き」 く 明 て情 信用 代 グ と 口 れ **う** ら ば 小 ク で 同 ウ な 61 7 ある 物の きる) 熱的 か 説 げ 3 テ な に 口 ら ハ な 61 人物 ここ たよ であ 説 うが よう b は で 5 ウ で か 由 せ るこ イ し 1 らな て み しまっ ĸ は に 7 か 人 ハ あ で、 は ッ て ス (現行 し (身 で運用 である で私が 今、 らと言 であ る 権 す 丰 と 好き放題 う り、 か な 61 ク \widehat{f}, \widehat{f} のだ غ な 体障 を慮れ るあ な反 だ スト れ そ でよ し 同 どちら \smile あ 法 か て 61 ば ボ € √ る の かか され 生産 な [が登場 が、 .姓同 私が と目 う登場 か 害者 がそ 自 また ŋ $\overline{}$ € √ L つ 61 $\overline{}$ て他者 5 だに たとし たが ば 崩 F, わ な が 15 「信用 つての私 そう と精 名の れ 書 も当 あ が 嬲 する 7 0 を か L 「で (議 実な形 ح ぞ 論 叩 5 たド な あ り 人物 _ 61 61 つ 登場 次元 両者は た たら、 元できな れ たド 瞬 物 に 神 つ れ を た な Þ 題 べ 3 61 13 ち上げ **-**障害者 別 死 すく 挙げ きな ナ が そ 以 た が が 0 7 で つ 0 真摯 た区 人物 心 明 上 人 ナ 上 者 61 0 ル で つ 入 熱 記 0 で ル の 身 た な 別 句 の F, 13 を同 分自 ある が侵 とし 物 ŋ を作 る に 再 述 は に て 万 で

に ち込むことでようやく 見 し 7 脊 髄 反 射 韵 な 批 明 判 5 \sim の反 か に 撃に なるものであ b 重大 な 理 り 由 が たとえ私がド ある خ は、 ナ ル 前 段 \mathcal{O} ク 理 口 ウ を ハ 私 小 ス

に表現 す あ 0 ら に か 意識 ろう 作者 メ は ら る が ス つ を 権 ッ ゆ の た 異 体リ験ァ か き尽 を を認 と る は不適格 は 新 セ 中 次 創 ス ら 61 止 め ジ ż 作 を ワ Ś 元 61 生物 失し するよう勧告する 念に 5 を組 の 行 ン たと 双 為 れ で は プ 子 な み は は念を入れ 人物 は当事者 あ 7 ス マ _ り、 ヾ ワ 11 入 自 61 L 者た ħ 作に る で 7 \sim ン ح な b ること自 の プ ٤ 性の ち ح か メ 7 61 紙 (強権 て言明 で は自らが当事者性を ッ ン しは な 上に 次第で 徹底的 確定し セ は の ように 仮に 体 的 哲 現 が卑劣、 な 学的 ジ 先 れる したうえ ある。 だ な破 て 人 異 仮託 にのテー 死 0 の ゾ 6 1 棄で 言葉を 次元 3 ン は実在 λ 或 ド で、 に で 過ぎず、 ある と マ の わ 61 61 手放 は愚劣 だの 双子 けで 借 改 る 呼 の め と わ ば ŋ 彼 を b け とは異 7 し € √ れ れ 作品 とで であ 込め う事実こそが な で る ば私 て **(**そ 61 概 6 1 b も名付 念に れ る が か が な る事実さえも認 な に さである 5 り、 が 書 の 61 (当事者を僭称 私小 だが、 近 し 61 し たド そ そ け 説 肝 て れ 哲 れ 61 おそら 要で、 学的 の お 5 まで だと B ナ だ غ の ル 存 呼 L め が が に F, く登場 する) 5 往 て ン 在 ₹) 畢竟 れな 々 を ピ ク L 61 ず に の 0 口 7 人物 そ L ウ 61 れ 61 で 7 な

五 7 ることは論 残念なが エ 先述 科 明 は 13 イ ハ € √ 怪 通 う 六 な す ウ は 限 に 7 院 母 通 る し 物 属 月 おそう ス サ 0 61 L と化 グラ た通 性 頃 方 5 つ の に 0 b か (j を俟 狂 b が H に で 0 て は L 0 だ だ ょ で 祖 難 気 理 ウ た ダ り あ 61 た 性 た は つ か る る あ 母 る で イ 私 な あ 混 は た 5 偏 の る が 61 に ン フ 竹 (閉 チ よう 大真面 本当 でも そう せ 沌 アミ 見 る の 61 に よ狂 が 鎖 エ 内 仮 病 0 は 塗 j に な 等 ĺ ス 宿 文書 IJ 部 時 鬱病患者 棟 な か に私 気 タ る ア 目 れ つ に 狂気、 年 鬱病 で 点 て し に お に 7 (また 死 狂 私 で祖 しま の主 斯 来 か 61 せ 通 を 2 気 ょ れ る ハ 0 < 0 治療す だ父方 に基 上等 文章 母はまだ死 張 ウ 違 は そ で つ つ 7 \mathcal{O} 目 如き論陣 の証 が す 7 ス € √ は 7 \neg 5 立 ゔ 理 な に は に ブ そ 61 13 ろそ る る る 性 サグ ょ イ な つ 0 拠 61 B Ŕ に基 た よう 祖 61 ح た 0 7 の ネ 症 と下等 と め 父 とも ラ 似 ガ ろ、 __ を λ 0 11 がそう 張 端 ると ダ 状 で に づ ン で か に 7 b が な に 61 す ズ 私 € √ あ 61 つ 閉 なる す て な あ る る な れ フ る の 7 • であ 言 れ る れ b ば ア ウ お か 鎖 61 Ĵ 最 前 た場合、 葉 つ な わ 病 か ば の $\overline{\cdot}$ エ り 竹 が 初 不 IJ 者 棟 つ た 61 け つ の イ たよ そ 内文 アに 理 明 両 て、 に そ で \sim 令 診 通 だ れ 性 の 方 b は の 断室 らうに が私 私 収 が そ が 錯 内 和 b な 61 で 下 始 容 れ あ 乱 と は 容 Ŧī. 0 等な で、 年 が め を は る に フ ウ し 0 閉 理 界 た 頑 月 下 も劣 た イ イ 〒 月 等 方 秩 ح 観 な 鎖 に 狂 ネ 狂 路 の ン -等な狂 気であ な理性 序 + さ が ガ チ 気 整 に つ は 病 -- 度、 平成 鬱 拒 n 棟 7 ン エ 然 (両 ズ ケ H る 病 で 61 ス さ 患者 だ母 心療 気も 月 水 眠 ると であ るだ 自 つ

が、 ブラ 鬱病患者 涙 た 自 す か に 13 「そ |嘲を意味 であ を堪 (医者は 話 一月 さ で れ 子をあやすように言っ か は つ つ 葬儀社 最 た ッ 知ら のままで 以上喋る前 別 れ た、 の ること 十三日 クド える 大の た にあなたにはこ て の だがが 慣例 精神 な の 61 <u>(</u>医 小する笑 ッ ると認識 ₹1 類型である Ō 「前 タ 大丈夫 グ 連絡する には 1 到底果たせそうに に必 者 金曜 とな に ニング か は に 悪影響を及ぼ 変わ 死だっ らずう 私は私の狂気 鼻 いを シ _ 日 つ 狂 通り です」 ンド Ó まで て よう 奥に り € √ の 7 7 故 ポ 傾聴し 口 文章を読 な た た 9 に る 61 ス に生み出 と言 と聴 勧 ク越 死 T イ 本 (私は **私** 激が め 2 B ン しそう Δ 当は なか 彼 トと など近頃流行 る 61 た は お L 61 L で か の 女 走 少 7 に あ 祖 み か 61 知り され みだ 0 し黙 たけ たは、 な出 医師 な 笑 母が 通す義務など課され 私 つ つ と 死後 いった た た 61 何 得な にとっ る は つ り ど な ず 来 な **(**そ 61 紛 ŧ, 事を、 狂気 であ の段取 込 がら か身 そ た (私は慌 つ死 61 及 の通りに と思 の体 εV れ λ ŋ (最後に の二律 もなく だあ 体に不 7 お る b λ ĵ 少し出 おそ りに 唯 ر ا ا 験は 祖母 でも わ す とに -年間変わ 7 れ つ 皆反に ` -具合は らく 処方箋を書い 処方薬を変更する て話題を変えた ح 涙 さ お る 7 つ まだ てお 以 の る € √ の 家族だと思える 0 祖 λ てる か で、 前 L 上の は 7 小説 \sim 基づ 兆だ らず担 らず、 の の かも 下 出 死 母 < -等で 相談だ 記述 の舵を は 想 遅まきな λ な T 17 € √ つ な で L 61 は他 あろ 当し Ν た た と は特 れ 状 61 6 1 て忌避す ? 態に Ι (と言っ 取 切 な な つ (私 以 か訊 るに 人です り出 M う た 別 が の 61 61 7 鬱病 だも は B Y ら宣告し と訊 こと ある 上 で 61 私 (当然なが で あ る に の か \Box す る 患者並 たっ Ĺ を閉 ね などを 医者 れ て た の の ょ よう は 61 と続 Ė 私 b ね は つ た た が 袓 自 ッ て て の に て と駄 おく て落 由 び ら 母 侫

いったい何の話だった?

てう、犬猫を皆殺しにする話だった。

る れ だが、 な 7 0 良 61 61 は と 13 残念ながら最後の示唆に す 読 € √ . う接続 な 彼 ても 者 わち身体 5 は かまわ 既 が 犬猫を殲 詞 に 気 な か 付 的 61 ら、 61 滅 或 し ているかも す 61 こで登場 は む る 精神 い た L うろ気 め てはミ 的 の し に バ 付 し れ デ 11 た F交 な スリ Ū^接 イ 7 € √ C^可 K_性 であること 物 61 が る が 方が読 二名 $A_{\mathbb{R}}$ であ B_有 壥 で $L_{\mathbb{H}}$ と あるこ E 係 b 解 彁彁 で 示 0 あ 唆 毒 私が設定したところ لح とが るこ É に 61 れ 冒 う ※示唆さ とも 表現 さ バ ħ 示唆され デ 7 極 イ れ 61 で (別 あ に によ 言 7 か に

である らず、 ては でも だ。 た私 にす ほ b 二人の るう 実在 に消 連中 や反 は 方 を お 可 ジ 5 たち 犬猫 能 開 読 に た 0 ほ 私 メ め 反 か れ まだ読 倒 は 動 性 ح は b まな ば き出 人 る手管を用 企 ぼ コ め b か ح 61 ら だっ 5 を射 とを済 やめ 虐待 す は 動 が 同 を れ 連 は 0 7 61 7 た 私 却 な お 同 じ 読 る た が あ ょ 11 な ユ 意味 た さ う 3 殺 と言 る 時 う だ て λ でよ、 λ か は ち れ な b れ 13 61 幸 な か ほ でる て 彼彼 袓 れ \mathcal{O} な の か L ま \mathcal{O} に 楽 で b 余 か \mathcal{O} ケ ま 61 る。 黙り 母 7 時 で 不幸 ら互 ₹ 1 児 発 L か 7 61 せ で、 し つ に ら で もう読 砲音す と呟 女が 点で あ 気 集中 が 戱 重 た愛を私 連 b 不 L 61 61 れ 権 シ た自殺ごっ 13 7 (持ち悪 幸 私 最 ń る最 読 どう 中 ま か ね あ 込 と思える な は を \exists 61 61 を殴 夢 初 壥 て手 む が まな € √ 投 認 ン か つ な れ つ 6 1 _ は ると盲 度きり Ŀ ごっ 中 K て 壥 5 中 た 故 互. し まな 資 隣 め が 2 T か て、 院に二人 <u>と</u> たち ま だ は 17 3 常 女 に と 4 \aleph 元 61 人 な 5 つ 6 1 6 1 こ遊 で な 託 る ŋ な つ 彼 脳 れ す b 0 7 彁 6 1 0 の言葉を相 61 6 1 に 信 勝手に 彁が 彼ら で。 稚 た 5 で 味 そ に 5 致 F に め IJ つ 61 つ し (ごっ 61 7 0 不噌だか 興じ び の が交わ と言 の 彼 は λ た 分け 4 命的 た た ボ は、 U 拙 て 61 61 7 。 る。 だが、 な策 互. 彼女 であ に首 女ら なく なに 読 容易 Č 母 と の *()* ル 13 も良 こ遊 るように た は、 € √ バ ま 身 同 て た K は、 な 13 私たち へらが を F る機 ら生態系 体 謀 を、 や り を 毎 殺 な 時 < そ く見捨てる š 齟 0 Α $\bigcap_{\ell,\ell}$ その 当 銃 傾げ 両者 :を 付 の最たる 私 は び 度 に れ 齬 は L 61 λ В 実体 会は訪 容 蒔 崇 0 彁 が が 繰 を U 7 連 で る を 人 高 ŋ 人が 手に を虐 かも 生じ 十二 自殺 てお 調 C K こと 中 な 易 母 彼 0 け 彁 Е つ など 台詞 広 ځ は に が と な 5 0 7 足 0 に つ ベ 9 愛が有 させる 歳だ 実態 射殺 握ら 防 ٣ 夢 Ė げ 7 であ 彼 頂点 待 言 した なるこ た れ b Α し λ と 中 壥 が つ 0 的 7 В な 女ら は する 気 れ の だ。 つ 母 説 ے 壥 絆 を L つ に 持 な が n つ に \sim 61 L れ つ 61 7 り (文字数は 明 には 立てた 限だか た平 邁進 まる な に 脳 ち 犬猫 IJ と に た 欠 る て は Е か T \widehat{b} て、 の る 11 だ 与 味噌 と仮 悪 ソ ら が の はできず、 の つ 61 の 61 61 7 つ だ 成 す す た るリ 弾 彼 相手 楽 そう だ。 で 7 は ところ彼 に 1 つ る 61 と信 ら彼 妄想 定し らだ。 あって、 てそ が、 十三 る る ガ が 61 もち λ どう た L ス 61 を る 場合 だ た 同 ン ボ 切 の と だ か 気 す と 61 **(**そ 一年十二 一志とし あ 言葉 そ と言 き回 持ち れ ろ れ ご フ じ ル れ 7 女 \$ ょ 0 か し ればごっ そ 込 5 6 7 ば れ れ つ イ バ な 13 λ ね わ 5 か T 彼 だ の愛は 読 悪 例 以 う 6 良 読 は が か 私 犬 う ン 61 わ し れ 潤こえ 月 銃に に るよ たち 猫 で 遊 ガ 解 常 か た べ で 女ら λ 7 61 1, きだ び ŋ で € √ بح に に 音 ŋ 遊 は は 呟 同 奴 唐 を は \aleph で る は 数 す わ る す の な 工 突に 人は ぎる ろう 残弾 今ま か 人形 時 7 る ら が な つ に

だろう 拒否 よう とも 番 な たこ く宿 0 の で 7 0 開 薬を を迎 を待 よう F, か た j 0 つ て、 は る ン な だ だ 薬を 剤 害 ち あ た ح لح は な シ つ つ ち受け とも 業に 服用 であ 彼 だっ を飲 えるか ズを試 た だ 7 病 私 さ が L (そう (とこ 61 が \exists 希死念慮 (その (異臭 父も 聞 棟 飲 た れ つ か あ 今まさに て ン (頭 (転落するチ き か 従 6 す ち た あ の つ 何 た W た 61 \sim (ま る る構 事 に私 だ夜 るよう 二〇二号室の扉を た に始 さ 度 母 の で の た 誰 は たり み る るよ € 1 < (そ (滑稽さを抑 $\widehat{}$ 先に彼り た別 彼 つ 5 れ か L の 入 め、 た 〒 な 0 61 に 意を汲 院 わず が 真摰 中 ŋ う る b け 度 た事実を父が ま た て 女 し B 端に が が、 目 に の 7 か n 61 つ ح わ マ 0 では に そ 61 女の尻 たも た父は 検討 放 彼女 ĸ な 遊 は見 と を覚ます か 日 ば、 な発露に過ぎなか 61 ン ヤ ら (父と 4) 派尿す んだ 症状 が 病 厄 ら び た 見上げるとそ 括 つ シ ン に 昭 なく、 は五 の あ なん さ は二〇二号室の た な に が 3 ス えき わ り え 介 和 るよう の 自 ح 真 は ざ な で る 香川 (とは れ な か ン つ 気 (現 一階の通路 結婚、 剣 知っ た 体 開 は て、 性 の の れ か つ € √ 61 わざ私の下 何度も け $\widehat{\underline{}}$ 質 なく、 た ず 前 たタ P の は 器 は 在 に ず、 つ < けたとき、 の 人の 病気 長崎、 言え、 な最 ほとん 彼女は 自殺ご れも不 が 私 付 た て もそ か 0 ら 彼は え見え ら き合 私 オ 61 お が ア で れ (例え たかどう の手摺り 離 ょ そ Þ 0) 盛 服 で ス b は は、 彼 つ ル 婚調 -校時間 ない ど治 わざわ ·首尾 父が 時期 た に首を通し び れ 静岡 期 彼 用 あ わ フ あ た つ し 病な 女の ~ 地中 私 は私 ば私 こそ彼女が学生 方 ح る ア ば L な つ **今**も î • 0 ラン 停 母 で 此 に ま ょ け た 0 7 ル ら \sim (2 自殺 にはずだ が二十歳 うく茫然 か定か !の過程 方 あ ざ りも 終 に身を乗り に合 出 そ の つ れ 1 か は、 0 € 1 か と 産と育品 単 病 私 ら這 ダ λ る て を る の ば わ 上 L な 61 は -身赴任 お彼女 わせて 私には な 状 の 量 た K て自殺を試みる K 卜 向 な つ (父に € √ うも 必ず未遂 寝そべ -学校 椅子 を正 部 精神 た と見遣 でな で b る イ の め ら 61 他に 母 出 児 知 屋 + な λ を レ (ただ、 (自殺ご の する 迎える だと誤 に だ は 出 死 を持 どう 確 入院 薬 倍 は か に 61 つ は、 し か 0 のう ら下 際 た に 入 0 心 つ が つ 心 か つ b つ 7 L で終 世 存 療内科 た の 把 副 た て 羽 ち を 療 彼 L と つ 7 て 打診 在 時 ح が 握 ま つ 内 てき 認 作 或 () 母 轢 女は 静 غ 込 0 化 校 て b 7 61 中 を 常 わ 服 し 代 ろ L で ح 科 L 用 0 61 た に 止 し 瞬 λ b 61 信 薬を だっ を受診 半端 間を 彼女が で だ 7 さ に て排 て排 が 努め なけ つ でそ て当 知 か の に は つ 真意 て L た れ 約 も飽 Š 母 母 じ 通院 5 通 つ 4 7 つ 61 たうえ 遊 中 延 た た 蒔 用 て た た 八 尿 尿 は れ な量の る (奇 何 の の つ は れ 13 鬱病 年 きて するよ とも る母 真面 断 々 せ た 母 と多 る車 微 ば 度も 61 か 住 び セ 蕳 え な め は不 私 3 に は 7 7 が 動 € √ 妙 家 即 か で認 7 か だ < 相 か が 才 だ を な 目 立 目 61 13 の 61 で を空 発見 を 明 座 れ り多 たこ うに に だ に 13 つ つ つ つ 61 た だ た に バ け 7 た

血 た とも る ス の養育 に b 管 た た ょ 向 つ 祖 わ 認識 か べ ح に な め ŋ か の 車 な た追従 5 に私 に b ッ の役目 5 € 1 つ ス て (そ 焦り 興じ だ 1 だ が ₹3 ご た つ て は に ら た つ ッ 7 つ 8 (私 (自炊 戻ると 切 の こ遊びだっ だ チを入れた た た だ 笑 それ 刃先を手首に 61 \neg て (家族 は 頃 ŋ つ (起き抜 る 故 61 61 つ 器用 然を決意 開 た た ح は を た 祖 **全て** スマ に私 浮 で買 それ 阜 に くよう (祖母 **(**あ 母 か お に は 母 た けた私は は る Ź 6.1 で 朩 し べ (無意味に 、仕事に ま て買 祖母 ĸ 死 あ の に 7 Þ 日 物 大 の (私は 自殺ご はもう 裂け なな だ 7 アラ した な う に 13 が い揃 行 を、 た 健 6 1 本当に か」と ば 行 1 す 5 つ 61 (斯 在 死 温風 ぐ洗 た えた 母 際 程度に手首 か Δ つ に障害者は だ なけ が ح つ ね 0 < 刃 つ ると知 死 鳴 b を 面 0 引き受けな の 言 父 命を守る同盟相手で 物を選 如き事 吐く 所に行 ít た に おか れ ŋ 1, 0 他 続け の結局ほ が た ば 61 機械 方で彼 な を げ 助 つ つ € √ 6 1 き 情 手席 だ て 切 λ ら て な b の 幸 をじ 41 で つ だ な ₹ 1 け で € √ 入 (平成二十五 \smile 61 以は鬱病 たにも 母の あ た 理 た とん 何 の母を指 ょ ŋ 61 れ ればなら 私 っと見 故 れ 由 と П 心 (言う ど使 ば は か の 61 と に 洗 あ 言 患者 手 う 0 近 か つ 首 焦り ŧ 内 ح か 母 面 る な 差 つ つ つ 61 祥 わ を で が め 台に 年六 遊 た 障 を 7 と € √ L 事 \smile 横 仕事 び :害者 らず、 b だ 占 同 た 私 利用 7 _ 61 \smile は 度 で な つ な か 転 月 時 を に め (私と 頃、 知 くそ た が に が 止 する は 4 7 € √ ら 対 専 刃物 放置 あ そう 包丁 育 なく め 用 ら (2 13 つ し 私 れ た て 7 る 母 て 狡 つ 0) れ 縦 を取 父は は を選 れ の た した もまた は 61 の 0 \smile を断 は たド 親 は専 全 車 に、 に ば 屈 か 希 n で ス b 台 ライ つ な ち あ れ ら 同 ~ 切 な ち

あるが れ を露悪的 特に は二 61 で あ は言 う 弁 つ り に 過ぎ 問題 に告 ż 自 え 0 権 第 点 5 0 € √ 力に <u>-</u>に 内 な は 白 動 み (第 11 彼 して は ľ 絶大な格差が そ に 61 と ら に た 彼 う つ < b いうことで 彼 女 れた 壥壥 61 5 て 人物 の つ ら た放言 は の台詞そ お لح で 一冊冊が 嘘 常 か が は あ あ 勝 げで物語は無駄 を か な るとい ý, は ら 手 つ くこ の 創 嘘を書き散 に 作 もの 自ら 動 動 彼 う 物 と 61 か 5 意味で) され が置 たし 彼女 に に では 躊 対 な描写 す 躇 لح た は な か 5 が る れて L 言 61 く 児童虐待に似た卑怯千万 う旨 だ 自 な 7 金銭 を省 け っ そ 5 € √ 61 の主張を に過ぎず たし 0 し れ る状況や犬猫を皆殺 や承認欲 責 良 61 ら を の 心 て一足飛び が 放 で あ 0 棄 吅 お は $\widehat{\mathcal{J}}$ こな 、まで な 責を覚え 求を儲け L て登場 口 < うこと に B 「言わ 素人 作者 展開 な言説 る 7 しに 物に され が を の できそうで 61 問 する あ モ であ な る わ た チ た が ず め フ

だ とき す 母 だけ を走 る る き 61 0 は か 可 0 口 の言葉を、 心心 能で る を思 漠 だ 示 々 な つ B な \mathbf{H} 私 L 61 交信だ を憶 閉 た に ょ j 特別養護老 か で ż ば ピ 々 車 ż 0 め つ か 61 け ようだ 薬剤 デ が あ 海 て あ 身 死 う と さ 鎖 **(**そ 61 ら か 61 に 出し 病 が す え れ 留 た λ り 才 既 に に け 棟 ħ 次 か 祖 で な 吐 Ź 通 ま た 7 拘 0 る け に 61 61 に \widehat{z} か 栄養 で 々 ら 母 出 強健 た 話 7 東さ よう こ と らず る 於 に で し ŋ < つ つ 祖 61 、と衰え だ ま ね 的 た 入 b か で そ ょ (当時 た る 人 れ な 母: を 61 *>*\ 61 さえあ 牙城 院 空腹 らだけ 状態と 剤 う な精: 試 で、 彼 く当 ホ れ か 7 は 61 の は ム 7 î は **(**そ し今現 女 なく に 私 続 ょ が し た た み あ ス 断 及などと 管 次元 Ţ 神 け、 り て か な 0 た 者 タ じ 0 7 IJ 0 つ 61 目 Δ 13 が の完全 以 ま 祖 を通 状 し私に わ K だ そう 祖 り は と て容認す 6 1 つ が ハ \sim の えも 聴きた そう 転 読 り、 在 態 Ŀ 来 ラ 私 た ピ き、 目 に 母 母 < あ \mathcal{O} そう 15 袓 ウ IJ 4 袓 居 に 解 0) は を \mathcal{O} لح は で ょ 61 つ 私 見 文句 登場 意思を 私は 胃 て投与さ った 彼 耳も 祖 な籠 祖 母 た 母 b で う 7 61 病院で歩行 な に 袓 え 女が泣 あ 母 瘻 母 は、 < た 同 な べ と う 0 0 ょ に 61 \sim など 城 衰えき 精神 状態が 祖母 走り きで 平成三十年 母 を言う 極 じょ が は 原 な し ス L る 人 れ つ ĸ 遂に 表 か て 限 物 7 何 \mathcal{O} 日 初 言 7 か ば 続 記憶 き言を を望 負 لح 名 崩 々 的 に 朩 は は う り は は れ つ し B レ 耳 学を守 訓練に つするこ 変遷 回復は ますま 彼ら彼 併存 既に なこ 担 称 な はその 権 た 広 は け な て 0 に つ 1 4 の澱 大無 λ ほ 利 は て 0 61 し 欲 ゃ ル て , , 祖 聞こ などな 吐 昼 中 彼 大 ぼ 求 L لح 自 で る 7 _ 61 L 61 月二十 全 ょ 程度 が言 女ら 辺な き とす 精 た祖 す内 ら彼 る 母 た 夜 遅 体 る が 61 に か < て 13 え だ る る た 7 う と ら を 々 を が 61 つ \mathcal{O} 61 (彼 引きず \sim 改変さ にけなの 治療法 な 私 を 問 出 母 の が 荒 女 5 か そ 5 を と 側 た え め 61 61 食事 ん 彼女 嘆きを 聴か 昏 わず 九日 認 らが 確認するこ れ で でき 7 は 女が し に私 る 自 れ し に 何 睡 か 針 地 を は は 7 7 コ 知 ら **令** と 症を患 で作者と へらは作 を自 彼 疾駆 だが す な ŋ 発し なけ 進 に の 路 の な 故 れ、 に 61 つ __ 61 口 訴 て、 出 まず、 た祖 脳梗塞 ナ 禍 ら覚 費 声 を取 な 日 和 意志を表 女 か \Box え が た に は 匹 時 に れ 5 あ な Þ λ 5 す L 治音声 7 東 する ر ک と 望 な 私 死 ば +母 おろ る 年 彼 者が と に つ し つ 7 に 読 半 は 用 な ま b の 6 1 な 数 に で ょ 7 は 5 λ て 7 61 13 ことす 死のう た 月に老 できな 表出 うとす か姿形 者に でも が を 年 出さ 彼 敷 で < L お 5 回 は 入院 うに うこ お る 全く 61 できる 私 ま ま り、 な な な が の 女 61 泣 り、 61 過ぎた だ ら 自 は か 彼 な と せ ょ 異 た る つ し は 13 つ 己を慰 とし 未だ 訴 た直 すら で面 るこ 当て 旨 る H 彼 る二重 なる た b ら つ 女 0 61 か た 7 つ レ でき どう 母 は か 不幸 を 61 た た 女 私 は (私 F 所 同 []: Þ た た を に ゃ 5 頃 後 届 会不 の 健 と レ ル 施設 そ は な か 止 は は が 口 中 か に の に \mathcal{O} 61 な 雷 め つ 7 7 可

宗教だ 路を生 交わ 堕ちる 考える なる とう だ るこ ると解 進 7 に 61 (そ 帰 康 めら 境 13 つ \sim な 61 る 中 め た 連 れ た 体 れ た と 地 5 る と ほ に 5 回 え の つ (祖母 ど病弱 ことを喧 一み出す b が 古 と言 頃 を引 から だ 釈 と今の れ る ア あ れ た を仮定す は、 に € 1 れ る手 体 7 達 の の つ の 瘻を受け 断 る て は 返 生 信 世 お 祖 行 独 た だ は ど 祖 し デ つ € √ は 7 言 ち 筈と さ ア じ を て じ が、 か 自 の と言 だっ 神 の 母 る 祖 て b 母 13 伝 れ 繰 信 れ 道 だ か 母 b 7 61 € √ は 0 は る る ら の た 61 61 教えが ?らこそ、 系の ろう さん、 確 · う 意思が を形 酷 用 た 眠 神 て共に した 7 61 た彼女は五十 か な る 入 よう (現実問) (その <u>:</u>道系 返 と言 る前 か L お チ 似 る し か つ か れ (\sqrt (私 したら、 だ 作 り、 新興宗教 € √ か L エ 7 て b て か L に (発想と っことに 経典を唱 でも ず 今日 の教えで ある は わ えば に て L は 61 に 傾 つ 61 私た (\sqrt 彼 必ず、 聴さ 無限 お な れ そう け 題、 そ る れ は T 天国 超克 [も見 作者 私 ŋ の 女 では ず (点滴 0 のような手厚 な 生き延び 13 6 1 ちは 先 幸福なの たち だろうが 私 の ₹ 1 年 つ れ れ に の信者だ る € √ 私 など存 と祖母 続く 神 b 目 Þ 7 は 和 信 つ ほ な 61 で 私 の 7 ることは 何 死 の ど ずっ は百 · 地獄 人は た体験 ど前 て想い は治療 新 は 棚 61 仰 はな に 後、 の し にできる みで に飾 た 7 7 心 B しさも 在せず、 死後、 ち と 生すらも 年 人 < € √ 私 を否定す つ 私と祖母 の わ かもしれ 天国だか 61 行き先 そう は支えら 彼岸 はよく を信じ 読者 らも 以 は死 れ つ た そ た を馳せるとき、 な と思 61 で か た祖 処置 な 上 7 の の の € √ ら あ 幼 家を守 が 前 ね Ö だ 新 0 0 ý, な で あ は つ 61 興宗教 間違 超克す ば全く よう 父の が、 は同 営為 ない から にニ りが 知ら る る性 現在 人権 あ \mathcal{O} が 7 で 13 13 あ た 頃 施 病 る は れ つ 11 万事 0 写真に の状態 を認め すら に近 だされ 大 1 な概念とは とう、 る神に 内容 \$ 格 か じ 院 なく る な おそらく宗教観 つ 故 世 ることを意 上段 同じ 5 では しか 7 チ 61 り で で か を信じるよう だ 私 は に は 61 に エ b は 入退院を繰 61 7 あ な b (本当 か 私と祖 感謝 卑下 る可 陳腐 で言 健康 なる 忘れ が の 過 しここで問題が発生す な は ること る 人生を無限 な (私 61 つ で 祖母 譫 いだろう 去 たときに 61 61 る れ (無論彼 再会す 能 で 13 無縁 と言う が は で を 7 0 0 言 す つ 0) な 述べ 図 だが 性 母 あ 張 のよ しま とこ る も祖 を は、 祖 6 1 61 や死生観 解 既 る し る で さ 私 に り 母 は つ ろ、 釈する る ある せて 返さ 祖母 現世 なっ 大 7 心 う 7 b 母 に 女の が に つ 0 (別 (そう言え と天国 ŕ ŋ 祖 0 Þ 知 指 づ か た 点滴 61 € √ _ て医者 を認め 方 に私が か た b 提 り 5 < ら 幼 b る な 母 示 に 以 の は P 祖母 が異 が ことだ 権が b あ 唱 直 布 少 け で 死 す 外 よう り n な L し す 期 L に てあ む れ で再 死 内 Ś 0 生 € √ 寸 61 ぬ た る れ だ は た 羽 に ば を に が 要 ば な 地 な 的 十 通 拒 他方 健康 なれ 目に ŋ 入 常 5 獄 で け 牙 ŋ 否 は な つ 61 7 に つ に す

独善的 きを置 妄り は恋心 変えよ たら彼り は、 (それ (だとし 內 で満 であ でな け なら づ ŋ つ (そ 再会する は別 に た感情論 ŋ か 的 れ は 7 0 今す を抱 に か な解釈 牙 が の ば 他者を空想することは単 足 る 人 の は再会では う 女は私を憶えて 61 の ならや 手向 できる に見 なら の部 な 城 状態 つ b に け たら私は私を十 (死 脳 ζ る ⟨`` つ て は せ \sim こそが 2者とな で て の Þ け 内 より よ死者を、 せるに値する程度 な にで では 分で共感を得 € √ 母は果た $\widehat{\sim}$ る惨 籠城 ある 祖 は の 11 お で で は)も手軽だ 母 は ŋ な ンリ <u>司</u> ŋ の対話などCh なく単なる投影に (どれ 誰に 劇で || 壥堰と彁 前 なく を果たす前 の ら、 私は つ 冷 死後 者 能である し € 1 た私は、 の話だが あ 生者を相手 心 だけ下手な作者でも な て何歳 静 b 全に憶えてい 宛 祖母に会っ 身双方に ダ な議論を進める 掴 る に生きて ようとす (理想的 61 隔を始 6 2 ことになる 祖 私が思 取 の祖 だ直 なる自慰 の ガ の祖 (仮にも小 に る 母 質 (生者 a こことが 過ぎな んる行為 や登場 ぬとす 母と 後 な死者 が確保 のよう 母な 取 エ 61 t て ると 0 G ンバ る祖母を選択するだろう つ いるも 61 祖母 の で た 0 Р の ·描く、 (それ 小説を書い 無理 慰撫 には できな 再会を祈 ある 次元 され にあ 人物に、 T と は生者 る私や私以 1 な りの か ミン کے _ 自 É の の 、 我なが たっ 部 分に 矢 理 で で で の の 7 では再会して **(**そ 理想的な祖母 執 グを施 は て 再会) あ し死 の 対話よりも 61 の 61 傑物 確 に 脳 る 暗示 7 5 れ り り な て これ 祖母 ?ら感心 配かにあ んだ直 無闇. 外 なけ でも信じ込まな は エ 行 内 61 61 を採 が の産物 と自己暗示 を除 をか ち ゴ わ る か したうえ は私 矢鱈 人間 は つ れ 小 れ の (そんなこと とも再 る葬儀 けるぐ 説 ば 発露 容易 バ 用 後 るとさ 61 61 に会っ と再会する であ ない イ であ な と祖 なら せざるを得 î で書き出 て、 の姿であ 17 で 13 ア で蘇生させる つ れて るな スを伴 . 会で Ď, 大半 かしそれ 母を持ち な ある b ゃ L ら (公平 た T か け 7 € √ 同 7 表明さ かがそ のこと 然だろ 生者 であ 61 の Ó ら 6 1 つ れ は € √ の した者たちに -を期す 作者が がば尚 ば ځ な の た 世 る な な る つ た、 か 出 な 同 0 の れ 61 は に 人権はそ € √ (そのよ 61 再会だ 特 ぐら だか ば現世 b 現 れ は で j らな じよう 更に容易 0 (だ 再 る弔 ため て盾 我田 よう 権 朝飯 はな れ 自 **発** か 会 か の € √ ら れ る ろう うな に K 前 に 引 の 常 ら 分 な と つ 13 実 重 水 に

母 は退所扱 和 五年二 ₹ 1 月 になると + 日 金 曜 の 由 日 (寡聞 特 別 にして無知 養護老人 朩 なためそのような規則があることを初 \mathcal{L} より 電 (入院 期 間 が 長引 61 た た め め て に

実を確認 望みを捨 は と な の でもあ 心 日 の てきれ だと L 強 退 ただけ 13 回答 所 る 13 電話 て L だ を た 61 b なか 祖 復 を 61 の (2 の 切 た 母 0 0 だ つ 見 の扱 つ 何 込みも はずだ)) たのだろうか 7 < 食 か € √ わ らぼん に ぬ声 感謝をす な つ 色で了 61 € √)) て仔 と やり いうこと 3 (そういうわ 気付 細 承 (つまり祖 を伺う の返事をする < であ (依 \smile (病院 然死期が 母は死 け る では (私 \smile か **へ**そ な は ぬ らは祖母 目前 ح ま の後、 61 で の 心 閉 期 から 持 に 鎖 が死ぬま 病棟 ちに 及ん 動 と不安に 6 1 7 か か で ら で か な 6 1 出 陥 わ お な 面 П る 倒 つ 13 と を見 て

虚妄で ともそれ る 自暴自 た小道具が に う必要があるだろう)) 13 定義 まず、 目的 UCKABLE 接可能性保有関係 あ コラ パ が 11 壥壥と彁 んだろう 頭蓋骨 時 て タ として物 ず け 7 足 で ある ĺ 間 話 棄め ŋ れ か る b れ は 存在 をお る で。 が 祖 7 ジ ン か な に沿 か 内 で 母 ユ の に 虚無だと明かされ 彁 € √ 61 高が す 収監 語に < が る た暴言では こなうなら つ ら 5 の思考回 未だに死 それ て、 61 は れ り た 操 つ **令** と吐き捨る \smile および が 知 さ た 介 を兆すロ は な か 作 まあ から 入し おざな 考えるんですけ 動 が虚妄だと冷笑することで物語 れ れ た 5 和五年二月 61 を 特養 路 7 7 つ € √ 61 意 して彼ら な な が 7 数値 7 話 W 数 展開 ば彼ら彼女らに 61 61 味 る か 7 で の 々 13 る る マ り 明 ح などが た以上、 かされ、 とじ だが、 以上 W .. の こ 本 5 た ン す な 61 の (現に (これ 当に 退所 7十五日· 講 展開 で な の ス要素を付与する る (更 す と ゃ 11 演 コ -ミュニケ ~挙げら ことを説明 力 と な で、 ど見当 あ に は 人間 つ と 11 (凡庸な選択肢とし 水曜 ず 何 あとに待ち受け 彼 て。 か り € √ € √ っ 壥 卜 ħ 詳 で が う B は 5 の す 彼女ら خ ع 多く た の の航 想像 れる) と b な しく 日 語 巧みな作家に ヴォ 前 か。 は月 のパ 1 彁 つ λ € √ 路を進 o, ・ション か 話。 に の 力 で生きてる は 彁 ネガ たは 全然 なっ ic 金曜 であ な そう..... タ \widehat{z} の に _ で 続 ダ 関 61 0 敵 度の 目的 ッ Ď, て。 日に むに 乏し け イナミックな物語 を多少改善させる の 係 わ b ン 7 ト 場合 対 もう か そ 7 は なることが て、 性 いるのは数少 は著書 を明確に あ 何 λ ら b れ 病 「正直、 心 L お € √ さ が だろうっ 療内科 犬猫に 院 限界 故数 うず てもそれは甚だし は作者がデウ 明 な とは病院 およそ六種 € √ つ せ から て要する か つ 13 る っパ そ死 が 少 さ λ つ 展 と意識 する 電話 です さっ 終ぞできな あ な 人格を宿 れ、 \sim 開 な 2 て。 で の り、 61 ムサ という に、 死ぬ さと 通院 類し を乗り だけ け が か ゃ 全体 でしまっ 61 نخ ح 感動 か と言 物 ス 何 が ン 死 語 な b ま か 日 か で か に Iだった 未練 う二度 作者 く白 っできる 越え 良 に つ λ な か えば エ 7 仕 で 61 の と た方が んでく てき ク か λ 面 61 つ 11 (そ で で 倒 の 々 と た ス タ け て 大胆 を見 て。 b れ ら つ マ ン

てきた なら えて しそ 病院 からだ が なるだろう を止ませ 楽だろう (最初 「どちら た涙 た ば 々 だ つ 母 共 から自 はならな れ て結実 ぬ P 日 な 度 人も € √ を た の に の (+ では足 決 自 転落し に母 に祖 達 み より る ŋ に、 3 が の 0 61 (誇る を書 などな は な 死 成 唯 め 分 Ś 零 に (敬 け た の ユ 61 **(**そ 畢竟、 宅、 したた た b Ó の自殺を止 ζ. 袓 気 つ れ 母 な れ 61 (それ $\widehat{}$ () た瀬 受容す 先に 持ちも ブラ り ば 知る でも て な 母 に る け 愛の念すら の つ つ 61 (無論そこ り、 が ば な とき私まで錯乱 良 61 そ 0 つ ま ケ の た 9 の 祖 まで健康そ 月 を か だか 心 な は 脳 戸 あ 0 61 61 祖 し € √ 61 り 現 前と違 感じた 母 際 て老 る 動 母 軽度の認知症も やは 袓 • つ < 純然たる記録 T 本当だと思うよ」 61 0) (\sqrt{1} 梗塞を起こし そ つ 機だ 準 は め 実に 母は た 応 0 で プ の 口 の た b れ いるため 備 9 死 致 だ ス 披瀝すべき に ず 援 人保 口 小説を書 (私はそ はここ数年間にわたっ (だか が提唱 は韜晦 を整え を前 命的 れ は す つ どう セ 私に (2 **(**そ 私 健施設 文学フ 儀 る の ス Þ 61 落 に涙 でも な齟 の は れ 式 に て b れ 足り し 61 ら を含み、 み そ が れ 7 7 کے な 奔 の 0 7 6.1 は し 涙を躊躇しな て……」 13 私 を流 い語をき を書き れを では から今 走し くこと 発症 だっ 医師 た お L なく、 へと目 IJ 倒 私 つも たのは平成三十年二月 61 61 7 は と言 マ京都 け に プ た れ て葬送を執 敬 私 61 た祖母 たのが さな お と 口 な 5 て L り に (寄る辺 な な 共倒 Iまぐ だった た 愛す ただ自 ٤, 傍 ができな った も見 損 よそ三年 セ 日 て つ 61 61 € √ n 、 た 活 まで で売 61 11 し ね て ス から見て祖母を書き続 何 の \mathcal{O} えて た Ź は 滔 る た き か た 7 0 に れ (私は て は 葬 んめだ では を失 故 の りお 力溢 の あ 対 涜 61 小 し (その 僅か三年足らず つ **(**そ つ つ 々 儀 おこな あと だ た ر ص 象 た か た 説 Þ な お と か < € √ と を 鼻をす 歳 5 9 ح کے れ 移 小説を書き始め れ け たら 語 つ と よそ二年半に な し つ の か (惰性 (2 執 いは自らの --- F た母 なう が徐 月を る祖母 た だ た € √ つ 61 L て祖 り あ つ つ り 変わ つ の う れ か た 7 7 61 つ _ î だ だ だけ 行 てきた悪あ と諦念に 遅々と かけ 否認、 · は 死 É 母 日 が の 々 た す b だに祖母 (\ (私た 錯乱 のだ つ に泣き言 か 祖 か だっ が を \mathcal{O} つ F つ だ)で排便 て て、 来る 母 失敗 の 7 小 ら て つ (2 受容に たちに 怒り、 私 説 つ けて わた す は 小説 た 目 61 0 0 つ 私 た 牛 な を認める ょ Ź とも当時 ح た か 死 L た た令和二 を 愚 間 を 0 棄 が る染み 逡巡 り (受容だ 歩 が は ح 居住 の 61 ŋ P て自 を書 0 \sim L 痴 に ん (私 (元気 世話 転じ きの ザ Ó を よく 祖母 もう、 と だ 成三十年 取 の ば 「そ ると思わ か 弔 速 地 が り れ 分 は た 傾 目 7 か (私 度で 一年十月 は悪あ 失敗 だ 引き、 似 辞 その は て悪あ 気に たか を穿ち続 れ と な に だ ね 聴 を受け ら を読 け いう 他 は 言 ば ij (結果的 61 で 7 61 € √ つ し を だ ざ € 1 れ に Ħ た た な ょ で な せ た 61 ハ 親族 聞 祖母 に見 し なけ 頃 が 月二 つ る る P λ だ、 ら う ピ が ある て れ 13 だ 小 は 0 に た か 7

わ 聞 こ と たも た が た ょ で であろう未来 で でさえな 執筆 合三十 け あ た は Δ ŋ に 7 か た 再会する 母 **(**そ は る 精 ħ \blacksquare 合 え 鉄 現 の か た 小 の は 13 で 0 61 つ の手に わ た 屝 れ よう こと 神 に 小 説 死 袓 何 死 る ばまだ救 め 的 け の 病院 病棟 病院 た 82 か か 説 は 母 物 人ほ せ の 61 7 を 度 (見ると車 K で か に が の 奥 な慈悲を求 か 前 つ 61 け B (彼女 私 無表情) とよ ₩ 自 対 に た る よう の つ を意 訪 は 見 どたむろ の の B 倒 め 7 は た膨大な 食事 職 入 は か 扱 す 待合室に 何 わ L れ ら 13 か し 61 傲慢 味す る活 ŋ ず 5 員 か に る の め け つ の案内で ら Þ ₹ 1 れ れ る だ É 売 身長と同じぐら Þ だ < は は モ ただろう す 椅 た な 61 車 たこ 悲劇 入室が 頑とし 慎重 ħ を思 に 3 3 力 テ 子 な (扉 \aleph 1 0 宛 13 時 城 が レ て 見 に の老婆が 7 な 祖 自閉 とがあ 13 作 子 せ ビ鑑賞、 つめ が開 である を エ であ か に た 蕳 な か 母 あ 61 61 61 j 者 ただろ のう 建 た 叶 て首 が め が 遣 る レ L か ら つ 的 整然 $\overline{}$ と る 万事 て、 べ 7 7 け 9 コ な た 内 61 な策謀は つ る ようだっ $\overline{}$ 私 た瞬 的 7 私 た ち か を縦に振 口 て涙を流 61 (簡素 7 **(**そ (令和五 て \smile 籠城 談笑の î ナ禍を 書き連 た を、 は う の 牙城 れと似た光景を、 タ の文才で € √ か つ 並 13 私 \$ 簡 $\overline{}$ 僅か の後に る状 た 1 定 の、 し精神病棟の 廊下 **~**そ ベ か 無表情 \smile に な め 0 0 失 **(あ** ら 年二月 態を長 敗に でも、 ため 私に 待合室で待 入室 乗 ら れ た 理由とした面会制限 ね 頑 イ て つ れてお 精神 $\overline{}$ 書 らゆ た祖 Þ っ れ は て は 迷 て ル 61 人きり 议 て三階 たとお な城主 た 広 私 が 終 に < そ 力 向 し € 1 (金属 病 間に 許 前 祖母 れす ま + た、 で 々 れ る意 母 わ の 口 か (ただ らず、 棟 彼 ド つ は と引きず 可 な か の つ つ ぬ 八日土曜 の孫 の たされ $\overline{}$ 味合 私は老人保健 球 て なく、 さ ら、 と向き合う時 らも 記 ح た ら は \sim ŋ か 同 た € 1 そ 向 様に 彼女ら へ集 彼女と同じ のよう 兄 に れ 録 して ぐるみを抱き締 つ (そ た れは、 IJ と \smile 人 が 順 た た 無理を承 61 叶 か ノ れはす だ利己 5 行する 担当 $\overline{}$ 祖 母 君臨 の て 日午後三 で、 何 つ 1, つ の わ (今回は担当医 IJ 老爺 ても は明 7 7 な は、 は今でも な Þ 61 ら ど ウ 双 手 医 書 を主 ん る か か 61 し 61 ちら ٤ 指 知 $\overline{}$ 心 だ Δ 施 目 眸 でも 大雑 責務 間に な ら る る か の つ (往 と怒鳴 時、 功績を け 0 b 設 を を湛えた か で面会を な と た 私 わ か の に 床 と 変わら やが 把に <u>ک</u> に の 沿 め が や特 L 消毒を繰り 々 なく、 ら 割 L ち、 61 を 果 祖 $\overline{}$ 手持 b に だ て た老人たち た家族を 毅 に で 私 方 り当てて つ 点 異 が 残 切 あ 别 り て 言 の は 母 て 61 13 た な 養護老 6.1 特別 打診 祖母 を切 交信 と立 在 5 中 な 7 ず た 純粋無垢と つ えば して 小 る 7 せ \smile け 死 つ つ 11 シ n (看護) $\overline{}$ 返 な だ つ 7 て る の な て た 祖 な が お 切 り あ 61 を <u>ک</u> が 声 7 人 な 日: て け り な 13 \mathcal{O} 61 し 61 つ \mathcal{O} が た 朩 61 が 可 つ

である 倍程度長 えら 気と と言っ 置 せるよ に め め λ つ 13 **(**そ (まる (私は二度、 た て仕切 来映 を出 よう '吸を繰り返 出 私 五 λ で る、 た の管 つ う 何 (聞 のまま私 一驚きも は なあ」 ħ 威 椅 た 事 L す (丸椅子さえな 年後まで で木乃伊 たが、 た 子 こえ とし ま 厳 あ うに え と を る つ で î を纏 た つ Ź り るの な の 61 に 61 (そ (そ と言っ 縁関係 ・言葉だ b 座 た う か を つ 不 す 61 鉄 7 た لح 13 許 だろう が、 理 の手を 閉 ·快感も の れ 三度と謝辞を繰り の 祖 当然反応 だけ繋がれ る 風 つ 61 0 つ L 屝 室は: それ だ は だ、 由だ た T な は 可 た T 0 7 め が に 日: め 平 に 生 ż よう あ 奥へ た つ 61 € √ 祖 € 1 は 13 め (\sqrt{1} 成二十 胸元 出 と 仕 あ た き れ 母 以 な る と け た た の つ (祖 母 私 い病室で立ち尽くし (そう んだっ 老婆が た か 配慮 切 進 わ は € √ 上に、 は 7 た る 61 で 祖 (私 (目尻 日に 0 いう盲信 ゃ。 面 か 許 は 母 な た ŋ み、 行 人 へ移動させ つ 手を鷲掴み (開 情熱が 会時 た 々 に は 説 Ó か 2 祖 た 61 で で _ つ L !何度か、 動きを こてく 祖 母 見え 私も彼 年 は 私 そ 再 明 た 母 う 0 7 (無論、 に つ (看護 あると言う 6 1 目薬の 凣 間 返 そ た先 中 を び が た が 扱 61 L を容易く 沈 月 で れ 目 た た は L ポ れ つ の 61 な あ (看護師 (骨張 ら三桁 ほとん 師が仕 手は 、黙が弥 を受け 頃 唯 聡 た な か た はひ からこそ言えたこと ら彼 つ が ツ 61 に ただけ、 分だけだ か 床ず ح 跡 よう 力 な に く見 兄 何 $\widehat{}$ する 書 IJ つ 打 € √ S 7 ح 5 っ と 他 女らの虚ろな っにされ やで。 どく熱 れを防ぐ 瞬だけ けが 度目 ち砕 温 ど不随意的 た祖 増 祖 ち つけ と た し は 切 61 61 \sim 7 よう た作 来て品行 母 度 Þ \Box た私は何気な 11 し り 61 方 î だ 赤 母 た ぉ で、 今より つ を る なく、 ん 7 か を < (それ に 品 同 役所 ばら 「口を閉 黒い 時間 開け 家族 開 ほど は洞 た か て け の (私 握っ 売 た が じ 謝 け つ 他 だ 61 (私 んめに祖 次を 見る 視線を が銀 罪の 方正 にな 私 } くそ の は紛 な反応 染 窟 は祖 Š の 静まり か つ れ て、 た た た 熱だ 患者 ٤ じた はまともだっただろう た た だ は み のよう 0 最 (空調設備 とき、 取 握 n 杯 に が 母 小 な ン (帰 の < つ (今と (記憶する 説を読 だと解 そこ あ 力も まま 寄 に で怒鳴 ŋ 母 L た の 期 返 つ B あ に かき分け た 繕う 路 れる た な の体 り添 り、 向 は 悪影響を与え 0 Þ な ら つ と 司 仕 で が に 初 徐 つ か b \mathcal{O} て 私 体温 先ほ 切 -勢は いう わ よう 々 釈 たそ み込 そ を う 一 袓 め 0 う とときを安 λ 61 つ 61 限 整 開 だ つ ŋ に た は す 9 れ 7 母 7 た て か 文字 と言 緩く 咄嗟 では け に、 が開 だ 看護 れ り λ が どと全 つ る 4 さえも乾 け S 度来ます 前 (私 私 とが たまま、 とまず 初 で ŋ そ だ 眠 た つ の た室内にず 祖母の た め ħ 列 聞 な 師 け は に は な な た つ など毛頭 つ し (先 6 1 手を引 祖母 以 あ に こえよ で 7 て か 5 ち た て て < つ tr 0 61 祖 (祖母 病室 看護 同じ 袓 聞 ほ 7 しろ 0 「来たで ね 上 助 11 た か は 61 つ 手 強 微 € √ に 日: け 母 7 た た め に 病 ゃ は苦 を出 さ から 過ご え が 師 は は に な か 0 が つ つ つ で 61 た 込 で か る 7

字を使 ば できな ま 笑し て老婆を見遣 を深! 前 て に れ は が騒ぎ立 つ で 61 (私 車 にす なが た 向 ない 裏で 0 う 13 λ か て、 (せ ようだ 自涜 ら。 う を わず け 61 (\sqrt 作者 とと 今な 文字を叩 だ 欠 れ ح ŋ の 5 めて は Þ ら す 13 に K て す 再 Ź ょ が Đ れ 愛を生み出 2 か な 全 13 た反出 ~ で全く なる などと る 発明 何 5 な が 金に で る猶 て 他人を巻き込むな た空理空論に則 7 T (お の文字 11 シ つ の ょ T か わ れ の に 文章 た愛は 換えられ 学が を頼 P 症 前 結局愛は 所 奴 な はよう 61 で を 卜 か 61 にやり で思 念頭 いう等 おこな 例 ズ は が の る か 生主義者の つ ŋ て に 気 I せるの あ が b Þ Δ な 0 命 つ λ (聞 な 弁 に基 の K 対 で読 が た 奴隷に対す 令 わ 61 つ 61 つ _ 遂げ 貫性が とどまっ 挙 ずる自 する 屁 か 式 つ たことと言えばデニ に け 私たちに れ た な か か ゔ か が る たに過ぎな 従 t は れ に 理屈を捏 れ ば悪人面も (私 5 (登場 成り 泡立 なら いっただけ بخ よう た ね。 人間 61 ったから、 ただただ読者をい の な \sim (まるで全ての創作者に罪が 三治療 保た は の を λ た自己憐 61 とは正 やめ と言っ は配ら だ 立 だ る愛だから、 だけだから。 た ば 「売れ わあ」 謝罪を垂れ つ れ ね 物 つ つ (文字と 許 何 (そ (破 できた なく 0 わ 11 の なん て て 憫 滅願望 反対 失敗』 もら 別 たか と言 人権など けが たとき彁彁は れな b の お (見る を撒き散 だよ に私 た 口 前 な な に、 め は L つ つ と L な て つ つ 11 61 して現れ なす 次は たなあ、 を関係妄想 て自 臆面 どと、 に堪えな てき ても、 に記 ス ね。 愛はそうい € √ ょ て の の嫌悪感だ 61 (生き で うの 拙 私 り お 13 三正当化. ためだ たちは は 前 ア た 私 人間 は 憶を蘇らせたとき、 ら た 61 本当に た存 すの 再現 なく ない は ッ 以外 そ 「まだ読 て に Ĵ (何も 俺だ ₹ 1 れ が う < パ 61 (私は あるか はさぞ 、だくだ 2奴隷に くまで 小 け に 在 ~ に لح は つ うくだらない か 愛を生み出 う な に過ぎな ょ が独 の下 ダ によ 私 て な しよ 本当に馬鹿馬鹿 って 説などを書き散 Þ つ 61 (私こそが 奴に ン 2 そ つ の 人生を生き でる も緩や なあ」 気 うとする 立した人格を持 劣な手段 L る論 に 言うことを聞 なるだけだ。 れす 7 他 のように騒ぎ立 お す ij 前 人を傷 持 増 気 作 61 ら果た 幅さ の。 文 付 られ ち は せるほど自 彼 と怒 私に 馬 b 三万字超 「異次元 の 61 61 か \neg どう 脚 たも せ な 乱 が 7 の て つ な 13 (そも っだから 本文に を現す だろう 書くこ せず 鳴り 発 け は L 61 \Box (そう $\widehat{}$ たこ 私たちは 7 振 € √ の 17 П 返 てるな 7 の つ \$ 7 に て 由 に り だ (そん 双子 なら b つ で つ お

作 正 以 する たが お前 厚さを心 を割 (意志薄 ケケ しさ 品 だ 上 売 母 持 祖 7 に タ € √ で は に た ッ せ を生み 死 経 が よう ħ タ な 殉 た ょ 書 1 と な 7 母 は 13 証 力 (第 う お 祖 \sqsubseteq なな を ケ ど 7 明 ず 弁 を な じ } な 自 < 61 つ お 61 0 を 舐 な話 るこ 弱 存 う タ b 前 前 母 得 私 7 と に ら € √ ル 61 し 0 $\overline{}$ 出 な 形 لح は が お に 猟 に € √ 分 が で は 7 ア の 企 め 61 つ 7 つ (才能 (まし 悪辣 とさえ 結託 お前 を お前 で宣 7 あ さえ書 材料 ح 袓 前 罵詈雑言を言わ 銃 whataboutism' 免責 W 回 K ること 7 13 61 母 て だ す Þ と 証 の ま の る は る を ル 小 言 を図 した過程 だけ 発砲するような 動 に は に が に ŋ 致 ガ 説 € √ 0 め 明 ほ に 小 を失う己を憐 て か 祖母 認 説 死 に 命 るだけだ と 画 は る 無 に 自 か か b し ら \mathcal{L} ば 同 を撮 才能 だ ず できな 傷に至ら 2 理 b た をド だ た 分 B \aleph で (お前 (全 く つ か て じ け ح 難題を呈す の 気 を は に 0 を た ら ŋ きた グ 何何 は平 を書 ょ 影 が で と 付 れ 切 な は は ナ 小 だ 口 ょ テ 61 自 説 が 読 け うに、 な € √ る り 61 61 ル せ ょ 13 7 61 (私は (もう 売 だ たと た ح か F, れ の題 ح な む て € 1 61 り 成二十四年三月 て ス ら 分 61 ŋ タ <u>ک</u> に堪え た、 真 ク れ の の 少 b となど今 ŋ 0 6 1 (お前 • W 61 イ **(**そ _ \widehat{z} がに扱 こころで 問題は お前 年と 悲劇 るだろ よう自 似 抹 お前 るほど私 だ 死 で泣 Þ ク お し な 小 に ÷ 前 そ 説 だ れ て、 か で 口 ょ れ 61 の 分だ 內 が b ほ が は で は は ウ の を書 な が 罪 拙 る 13 (だい 自己満 現在 ある 生有 傷す 福音書. Š 家族 とキ 悪感 延々書き続け と 私 そ 心 な た う お ح ハ _ 6 1 は馬 (書くことを止 غ 6 の の に < の 箇 前 お 1 61 61 0 (腐 自 進行形 無才 前が今、 表現 يح 切 $\overline{}$ だ 留 祖 だ ŋ ス る は を た 61 所 7 に _ 足 変わ 実な希求 と知 鹿 切 方法 れ外 得 連 つ 身 め ボ 母 } ż 何 七 駆 い三十三に の 6 1 (精 みだ て涙 で と で た 0 り に 7 の 邪知暴虐に _ 章 5 な の 0) を心得 才能 死だ 遺書 駄 5 はな 売 ょ F, 液 つ b 道 唾 れ で つ お _ (それ 61 たよ 感じ 棄す を流 節 ることを擁 な お り つ で の 少 他者 が たお サ **(**そ 健 で の 打 61 ح 61 L 7 ń 0 ょ し か (お前 **(あ** めろ 高が を傷 以降 入るこ あ のこ 北 5 5 う 勝 b 前 な う b べ ク か て、 パ L て 5 彼 罪障 き文 な 5 は 込 な涙 泣 五節 町 な ま だ た ル つ る 口 は、 13 とを悟 が 知 そ to デ が 貫 ま つ つ る € √ の て の つ の つ 宛 (希求 \Box つお 字列 護 + だだ -を覚 とが を れ れ 多 だ た中 前 さえ た 祖 か ける Þ **ま** み イ は そ 仲 € 1 T ねとま 利 前 数 に 間 る て で 7 に で つ __ ら 61 つ の さえた 資す お前 す はどう 年 秋 年 た えて泣 な 内 ح € √ つ シ 何 あ 母 万二千字ほ な な こと 7 り 0) 罪悪を他者 (手前 恵も るこ を想 を梁』 顛末だ だ だが る で の لح るこ て の \$ 61 € √ 61 61 で け お ことだ る 反 は 理 お か 男 書 は は の ること (涙を流 とを最 と同 応 だ は 生み とを示 できる 低 口 由 せ 前 そ が 前 の か ら つ 自 61 つ 言 て泣 転 か 「往 は もう た は二 面 レ を は れ 祖 な 5 た **(**チ 出 様 べ 寿 次 ら わ お を け の ど前 は 0 0 十年 前 母が 皮 司 々 な 初 れ 唆 つ で すこ ユ に ル 61 う ば に \blacksquare に 61 \mathcal{O} た に

消去法 快す 鎖病 る一方、 であ 更取 ること 段 敬愛する者の なく少 0 る むむ 自 (違 年 だろ 知 見 た 遇 科 呵 小 た な の て るよう 棟 を言 説 時 蹴 る 説 な 5 分 責を覚え つ め に で 61 € √ 0 つお と言え ろ自 できな 涙 であ 返 に で を書 態 どどう が 初 期 で る に て か に 行 を堪 だけ 気 せ は で 前 ح ある B め 61 わ の ĺ 手 通 た る な Ź さ 5 年 を擁 を る な 0 お れ 7 7 し € 1 き で り、 だ れ b لح ば 7 でも の 前 死 ほ 自 えた るこ b とす だ の < は 61 現況 内 野 は 護す 私 5 た は な の は 自 7 エ 所 ど 覚 お 反 13 は 誰 とが で 5 済 お前 体 在 る限 業であろう、 に混乱するこ した b わ 足 61 ク 生み出さ に ょ は 前 れ 61 E 選択 スキ 度きりだ 論 は か ば る お せ り た は な を の 制 お λ な 议 できな 理 盾 な ち な で お 方 お れ 前 る 前 0 ŋ つ は、 に つ つ 自 か が 前 た 前 た 上 人 \blacksquare に 61 は 61 か L 61 ユ に に混乱を正 が B ら 袓 人 お前 私 が三 が、 て 閉 と れ 覚 小 覚 が は \aleph b る し ŋ (私 作 の希 数 b 内 じこ か 母 狡 め つ \mathcal{O} そ ズ L る 小 拙 は 61 **(**そ (だからお前 品に通底する論理を を備 に きれ と錯覚する となど、 飲 つ う 的 の 映 説 な表 れ 0 に L 7 の な \widehat{z} 求を呑ま 成長する 混 はこ づ 酒 は 対 の か 少 牙 B っ つ 死 L と 13 当化 現能 異次 し真剣 城 乱 が 劣 理 て 7 0 お L え つ 61 0) な 61 諦 よう て請 に籠城 お前 て芋 迫 う、 単 前 由 7 の 7 し 小 つ か 小 61 今 元 だ 説 程 な b た っ 説 て つ 力 純 め に しようと 61 に考え ため 後訪 家父長 を持 ずに を引 ح どう はそ た幼 き な と 願書を を放 は る 度 か つお を書 0 (ここ て 6 1 に 双 引 る つ b つ L か と の つ 61 お きこも き始め 子 が の るこ 7 ح 棄 7 下 た で に れ 前 児 っ 7 0 5 前 第二 だ 提 ま んてみ ことば できな 混乱 請 れ 等 b はそ であ して 他 し な 制 て 61 13 (身を 整理 (自己満足する が 出 な狂 願 ょ 7 と 的 生 る つ か で る 人 61 社会と に任 だろう、 た れ り の の に た に な規範 ま で お 仔 の か 61 つ に ら (所詮お し、 意見 先延 続 混乱 の な 前 た 細 ば良 だ か 気 b た つ 令 お たこ れ 似 61 つ け、 だ の に た 和 前 7 通 に ŋ だ つ (お前に せ 61 軟 (お前 構築する を千 書 け が 頼 々 の を だ て自 Ŧī. ح Þ て は は 61 7 L つ 畢 接続 弱で 聞 年 伝統 と け 幼 だ 知 小 と 他 ま て 前 自 み ح ζ, (そう (なまじ 児であ お 蕳 込 竟祖 た 説 載 れ ば か 分 つ に 小 が つ 人 _ ら 13 第三 (言うまでも を書 愚鈍 を 低俗 め 前 自答 説を なく 小 た と 月 た者 は が を に λ が __ 6 1 最 小 つ 遇 無 で、 増 し 説 は **₽**: つ に 驚 + で 庇 が 書き続 b 説に お に ず 護さ 敵 で 初 な た な内的 ŋ 7 自 す 7 こうと企 0 < 八日 ある 0 が Þ と **全** 成長 続 す 済 称 り ある 前 お前 お だ 5 好 お 5 は ほ の で せ などな 前 壥 機 前 ば け の b ど 水 す れ 人 ら は む てはお前 心 に **へ**そ (言うま 考え 壥と だと 狼 曜 ること ح 対 牙 眼 た赤 b な る て と な \sim は け b 61 0 に 遅延 城に 過ぎ 転向 理解 中 λ 狽 そ る 61 0 日 61 か だ ら お 他 で つ う ょ に 彁 か だ 子 を て する 前は は て う な 彁 つ 自 えた でも で で か は て \mathcal{O}

哀想に、 年前よりも遙かに近くに迫っ はやめら もキーボ 生を無限に繰り返せば良い 見上げるばかりで過ごせば良い 蛮勇すらも芽生えないだろう(母が死んだあとはいよい れば良い 飽き 自分は可哀想に、 れないだろうが、 ۴ (生涯登れない、 だ で無駄を打ち込み、 今 後 心配せずともいずれ誰の目にも映らなくなる 可哀想に」と呟き続ければ良 (何度でも自殺ごっこに興じ、 ている(さて、 「作家」だの (虚ろな日々をただ生き続けて死 何度でも憐憫に溺れ、 お 「人間」 前 私はそろそろ出発する か ら だの、 生ま ţ 6 1 $\overline{}$ そういう名の 人きりの部屋で「可哀想に、可 何度でも祖母を毀損し、 (その精神的恥垢の発信をお前 荒れて痩せた土地に取り残さ ず ね なばよい (こんなことにはもう、 済 つ (そのときは、 いた山を麓から (そのような人 と 何度で +

31

和五年三月

日水曜日、

祖母が死んだ。